

一九二八年

雜記

詩

感想

日記

断章

五二一〇

LOUIS S. FREEDMAN ST.

はやしたもつ

海一

あつた正々白ひやし事の中に
多量のイクターチと
ソーカスの裏に雪見はさ
日金と暮る、雪降る
（あつた）
雪と降り
雪と降り
雪と降り

新年の夜明け

ふたきの月を空に投げ

我は龍針のま

あひたり 新年を飯を (い)

自勤事に、話をはずち希望の曲

昨夜を来天に捧け

破聲は睡つきを待て

小唄ありに (お) 人へ (お) 中まを (お) 吐く

元旦の朝二時

入る二十の朝は特になり

我は我が針と意を得る

天は我が爲に暮方なり

也は我が故に月和なり

人は我を也へて曉つきを笑ふ

我は我を留り生く、なり

JAN 1 1928

0201

1020

信仰

信仰は眠る

酒に酔ふつれわれに

説教は九官鳥の舌の如く

又御音音を耳朶に西賣了

只わけもなく文伸を喰ふ

日曜は正台で生還り

長編二人の女を書き

白衣と黒衣の女

二
看花婦修造の女

一
吾年と死

肉体的救済の救への文像の一掃身になる

倭急と人妻を救ふ二つの道

肉と魂の供事

鬼を見る事は正業

善悪をわきまはたしては女は死んだ。

二人の女は死んだ

JAN 1 1928

0202

月光の雲

セリ
ソ
ロ
に
揉
了
、
バ
ナ
ナ
の
葉

サ
ウ
サ
ウ

サウ

サ
ウ
サ
ウ

$$x = \frac{1}{2}$$

~~3-15~~

付し 和 加

地爲首を傳ふ邊かゝ處事

星公降了

サ
サ
サ

月々に金の歩むなり

（米）に 醒め、夜、妻に

曉日遠く
雲に倚る

四日
水曜
時

働きあう事なすて今年へいきたと言ひ
花の古い
面影を想ふに
横やたりへ
返り言やを
きく

僕然と云うた脳裡に掃く自己が現象から遠く
生かのかに尻尾をふるうを見た。そこで、

一、つゝ老い、黒衣の乙女を求め、婚し、接吻を求め、初め
 た。
 一、つゝ白衣の乙女と、前にと云ふを告白し、ほのかに瞳に
 愛を、と授けしむる。

幾つもの魂が脱び交ふために。生きた現実の姿と
死んだ魂の姿が右左にゐる。それは可能な
うさ——業種と可能と言ふよりも何の機会も
持つもの、状態にあまゝ人々の意識の外に在る
った。

——女は幾人も幾人も居る。が、皆友
白己も本因に置ける。老う。同ドヤう左様格の女心
いら本もさういふ。愛憎と純順に表す本心も、
たやうな。

織田友心の定女達ばかりである。
糸はいつかをいつかも止まり兼ねる。と今般。
和らぎは性一人に因を——みたり。と本報。現在
この生活が縛りである。と。言ふは。遠くす
事、女何に重大の使命を一生懸命に生きた
もたうすか。と言ふ事を熟知しゐるから。
眠る。努力をた生活苦から引離し、前途を考

へる事は。畢竟は理想である。と
一時刻に方々とも心の因を打ちこむ。けり。努力
する。事。善い。和らぎ。選り。方。知。

昔同て心へる。言はせ。と。同時に
希望に生きたう。と。白分を見ち。回。は。た。

おも 室をなりのオモりに世をまへる心に

いと純潔な念頭を納める。

それは魂の表白である

何を言ふかぬ、

只迷ひ耽るゝのみ

老と言ふ、空女である。

非常な程に静寂にして

慰めは静かにしてふ、揚子江

月と星は、お麗にさす。

恋といふ事、
こせ心だ。

己が体はもくすぐたい、月

ふと思ふは、神祕をも用いと言ふ、
その香りを待つ

それは死の香りを事ある

ロマンチックな幻惑は

と云ふには、神の慈悲である

秋風に相應する空の迷ひ

月夜は、静かに

月にものゝろを、
静かに

創作三人の女（三つの恋）

- (1) 妻 武の男が、血に酔った場所にて
身を重く失うことになり、三つを愛する耳
軍葬の川に世常の屋敷別をきき取った
石橋より娘が下敷を水に投げた、へを
男のあが、抱ひに這入り、水のやに転倒する場面
(2) 女は三つを愛する、中が、武の男を拒げ人ため
其武男を、抱ひに離れ、中ぶ事
(3) 神を奉る者、自らたぬを、述す事
プラトニフクに、い、ゆる。

OK

庭園の ~~庭園~~ 一草の、楮を見た

来る日も、来る日も、お相り、抱ひ

雪が、ふり、と、同き、と、り、て

明日、天、を、待、つ、や、う、に

こゝな、て、め、が、居、る、た、く、う

埃を砕く波の赤陽を

砂に踏つて眺める

今日の夜は良の過るに

数々の思生を懐く

はつきり刻々と足跡が

あゝと云ふ一歩の距離に

私は墮落し方ありたう

情慾に煽刺され砂を踏

月丸の皮は女を宿す

儚く私は知るたうた

私はうかがふた旧道に

恋がやうくや来るは

JAN 5 1928

0206

24

JAN 5 1928

0205

0502

瞳は山桃のやうにうるんで
蒼き心が付きたりやれ衝動
足を痛くし替へて入る
そなたもあつたう

JAN 6 1928

0207

おまろ

取りい嬉しきう日想に

鏡のやうなう

そなたもあつたう

林檎の皮を剥きながら

こつと愛を想はう

そなたもあつたう

おキーと各々に接して

キョクと顔になあふ

自分の心だうなう

そなたもあつたう

しきとせすなう

我々にあつたう

省文

香山傳、中書筆に諱り、
支那館に在り、書院を以て

亦、東京府に歸回す。

佛、佛は諱り、何ん言ひ大

如、送別會に在り、

高村、直接來り、別館。

山崎、一心を、智恵を、

各、研究、予、言、

成、全、に、た、る、

更、に、研、究、を、所、す、

乃、に、乃、に

又、田、第、幾、に、逢、

乃、に、乃、に、乃、に、

4

地上に緑草を這ふ、
蝸牛を見たり。

彼の判断と意見は絶体心あり

彼の官能官能は唯一の信賴であつた

彼等持もくは至る方き體の自由と

生命を犠牲にする価値がある

つても、白を以て
徹せしむるに

漢書卷之七

自乙卯年驗在殘刻之步文

過去、新を接し、

金身を介
紙に
鑒す事
を老、
ない

私
は
その
替
牛
へ
あ
う
た
い

八二
七
日

は
な
ず
り
ふ
く
す
へ
ー
ー
ー
ー
た
ー

北に
徳木
万ふ
一
半
野分
毛
ハ
サ
フ

女ノ 主ニ 清子 取ニ 辱目ニ 弟分

冬
下から
揺
揺
つ
る
た
た
た

~~美~~美は
カクシ
湯に
入る
み

從
道
女
生
通
情

描寫の描寫

心に描く事件の因縁
今、話
と、
こ、

すゝかゝ感心さへした

造宣な事業。又、よき人たに倣ひてなり
た所謂大衆の言の如く

JAN 7 1928
0208

白く日

如御明 蘇吾に話たかれ、直掬、ユーも叙まうに
情甚ち折ノ

が、スルハークに

佐腰 舌ッウライスラで 遠 棄に 回 走 了

沼田 香

光

幸 澤 川 毛 文 芸 生 話 會 を 用 く 四 時 半 十 時
叙 述 に 久 保 田 主 人 の 戦 評 一 に 花 を 添 へ 了

ふと 書 事 一 見 見 見 ま 了 方 了
思 考 廣 々 を 終 一 見 ま 了 方 了

「僕 は 貴 方 女 和 意 意 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排
せ 日 本 に 歸 っ せ う 女 和 意 意 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排
の 女 和 意 意 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排

と、言 っ せ う 女 和 意 意 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排
期 一 日 女 和 意 意 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排
何 子 に 生 々 一 日 女 和 意 意 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排

日 本 に 歸 っ せ う 女 和 意 意 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排 撃 し ま せ う 女 と 花 を 排
も 書 事 一 見 見 見 ま 了 方 了
た。

奮勵してゐると

埃の汗が~~汗~~富息^{になつ}

第一~~一~~疲^これ^こ歸^こつた^こ

る^る。はかりだ^は 久^くく^くたり^{たり}寝^ねる

その偉の生活

66

艱^{かん}義^ぎ人^{じん}様^{よう}の^の心^{こころ}

汗^{あせ}の^の人^{ひと}だ^だ白^{しろ}髪^{かみ}を^を脱^はつた^た時^{とき}

私は^{わたし}五^ご年^{ねん}の^の昔^{むかし}に^に

やや^{やや}と

明日^{あした}も^も大^{だい}に^に通^{とほ}る^る

明日^{あした}も^も文^{ぶん}を^を書^かく^く

又^{また}

昨日^{けふ}も^も同^{どう}じ^じに^にか^か

私は^{わたし}生^いき^きて^てい^いる^るか^かわ^わら^らぬ

あま

JAN 12 1928

0210

JAN 11 1928

0209

加川文一君に

今 とうとう

此のほどを運ばず事分 和を北京に揃えたいと云います

中東の

会にから

譲渡して貰うに在るや。今付を請うたう

和は 其の如く 経営者方から 多くては在らうと云

自らの集め 電報 送るに 暫く 留め置きます

いよいよ 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

いよいよ 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

仮意を 掲げます

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

この 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

と云ふ 和は 秋に 行くと云ふ 和は 電報 中の 送るに 両方 手配を 成す 事 成ります

候し 勲 取 也 ね ば 良 け 諸 君 共 々 一 心 一 意 以 上
 我 一 生 終 べ 命 文 藝 の 道 に 進 出 志 願 心 一 意 以 上
 上 に 徹 する 事 必 ず あり 何 ぞ 言 へ ば 我 達 は 芳 け
 思 想 大 一 心 一 意 以 上 あり 必 ず あり 何 ぞ 言 へ ば 我 達 は 芳 け

幸院遊の皆
 此のこゝに
 在りて
 其の
 鑑賞の
 妙なり

命の盡うる（文）
 又、和は
 何れに
 強かる
 つの旁た
 明言した
 言ふ

[illegible][illegible]

ありを一新するは非常の
 大工にうへは

美り 和 ~~田~~ 平田 藝草 考 片毫 翁のしきすを かく 軍 ねみすた
か 考うを 心、なごん長い 司 せ
のい 荒い 竹 考うを 考うを かく 軍 ねみすた

今日 9 時 45 分 迄、
新正 諸君 へ
同 じ 年 間 中
努力を 加へ

[illegible]

貴方の手紙を拝見し、
 誠にありがとうございます。
 今後ともよろしくお願い申し上げます。

白者

夢雪打生

加川文一

PS. 筆墨の意を致す

[illegible]

加川文一
峯澤茂

一、講義の論戦の後には、

和は造る思ふてお題に書く

社説
コホウの好キ
レニユニカ
外エト
言ふ二人
知

112 附錄五

作者の攻撃の意を尋ねて如何に
かを言わねえ

華雲代々
加川 吾々
會一之
白口 移之
見付けた

山
峯
ト
嶺
日
ノ
ア
ハ
磯
砂
障
光
の
事
は

分る

カリッとした塩を
煮詰めては
にんにくを

其乃由賣、
 晴、
 山は白く、
 砂埃も塩でも

な
ふ
は
雪の
一塊
た
た
う
冷
た
い
感
に
そ

12439

作者は言ふことは
感會より得たる事
身にも

死心
きうた
言等いせ
友い

休否の神皇正統記
流本ものには字に
偽れた心違ひ

田舎友へ

か
考こ
思ふ
か
よ
い

亭無同隣改佛
は
了
之
第
9
何
ソ
も
た
い

山登り
水井戸
なく
却の
伊
ふ
水
こ
み
た

構
3
4
12

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

飲も落た丁
ため
の
外
は
い

3469

了の時
也を考へ
る
襦も
更
に
な
う

福
手
12
方
フ

金十

毎夜毎夜 夜更かしをするの心 どうにもこうにも
眠れなくて やりきれぬ

詩毛創作也出來也

昨日 山郭 香山 等々 十二等 過王

昭夜は山野、西向、吾等、峯雲、文

今名はまじやうやくり
眠本のい言ひのか

左のやうに
 何れも

之、
不
環
友
手
組
を
育
却
す

なまにありたいと君の来た夕
時曜一えい

僂ヤ筆を惠ふしこき下りた
管は年
リル
墨
ぬ
た
つ

僕は勤くん

スクリーン
の壁の
喰ひつた
電氣
の
讀を
知る

世智に於て
心不在
外に動ず

鐵鎖を引過す

僞
 口
 書
 宣
 と
 定
 志
 人
 女

井上 聖子 自由の聲

破古如散

倭の一事は又二船に回す

其
襖かみど敷しに
天井てんせいを
黒くろく
ややる
の
た
の

夜をゆく

夜霧を^ふ明^あく

にあつた

高

その夜霧か今宵を^しあ

夢^むの^や言^ごは^なに^なる

ん

その^その^の夜^よか^かる^る意^いの^の人^に情^{じやう}が^が街^{まち}燈^{とう}を^を照^てら^る

懐^{なつ}投^とを^をさ^さる

ぬ^ぬこ^こい^いあ^あぬ^ぬか^か 金^{かね}の^の義^ぎや^や志^しの^のやうに^に露^るを^をさ^さる

あ^あい^いけ^けを^をあ^あけ^ける

花

あ^あい^いけ^けを^をあ^あけ^ける

全^{ぜん}中^{ちゆう}に^に重^{じゆう}な^なる

ゆ^ゆの^の夜^よの^の心^{こころ}を^をあ^あけ^ける

あ^あい^いけ^けを^をあ^あけ^ける

星^{せい}の^の光^{ひかり}を^をあ^あけ^ける

大^{だい}道^{どう}に^にあ^あい^いけ^ける

JAN 12 1928

0212

22 28

水

高き天井をのけた草庵が
片立ちの建物は出来た

平井一太郎
十銀銀借ひ金を富判す

アイスクリン一個で割りちやう

私はさういふ懐いとか
猫やの事書と推し
うた石あにかこみ

物かん

物が
幸がこころる

みぎ銀一

イキべつり
靴裏の指は通

雲の白く後か
左へさあぬ
誘ふさあへ
白牡丹を
冷たい風を
建てる

女が銀一
今朝も
大陽を
建てる

JAN 13 1928
826131 NAR

JAN 14 1928
0214

0213

0313
83013 / MAL

柔港週報此から金持井送る事だ。

小説三巻の詩の等だ。

田中春峯、山手手手、丁亥、金持を困れた時たつた。

ひ又 オコラキマ

流し 一ヤブスーになつた、馬鹿くーい

詩論の創作の四巻を取りたい、笑う方々、未だ今も

ヤキ

本道かー 悪女には 描きさす。 稗方坊竹田無

か筆であつた。 世に 持建の序に 變遷難する人たか

女 女

理路正に つあろーと 葛の規で

和は 弱は 常ー

0215

詩編を写すために

人生の諸相を想ふに 自分を知るが、何であるか、とて見極め
る事は 困難以上の 困難を達見に要するなり

自分の現在何をなすか、とて、又、今、は金と自分の如何を
関係を持つてゐるか

和の筆で送る、重くも来りぬ

頭が重く

一月十日

一週同位、

頭が

腕

よりこもる

此一ヶ月の事が

詩も創作も来ぬ

頭が重く

勉強も来ぬ

有る人やりと、何を書けぬ

悲しくも来ぬ

何も書けぬ

足らずに足らずに

どうもたかく

口語歌

夏新

雪うた

雪 雪 ^{ひつ}す

山は雪 ^{わさ}わさ
外へを引き渡へ行く

とあ、雪友湯に言入っし

もう七時過ぎ

芝生が ^始 ^ま ^り ^す ^な ^り ^ま ^す

隣りく亮明りに

エトの立目がまげろ

と眠りこけ有伴ひすところいす

柳子の舎に

冬が目 ^あ ^め ^た

目の ^は ^に

霜が ^あ ^ま ^る

自動車のお言に

女 ^あ ^は ^た ^の ^あ ^い ^し

月夜、過ぎる

0216

あま

六六

月夜も買つて
酔つた女の足に酔子
日本を漂はる酔眼

中給、香化粧に

冬が甚あゝぬ

陽気な食ふ若者の人生

女の聲が、雨に響く

波々々、在冬の街頭に

如、摩の、襟を叩く

遠くへ、
誰か

馬車は外にもない

オヤサン、こゝろは、こゝろに

接る、こゝろ、こゝろ

馬車は、外にもない

あ

あ

何故も、金、あつた

若葉が、風に、足が、さうさう

うさぎ(見)、うさぎ、うさぎ、うさぎ

若葉が、懐を、あつた

JAN 19 1928

0217

創作 登る 驛 山 びりも 頭 父 子

才 藝 が 女 子 も 美 味 豊 け め 今 過 ぎ 期 だ

百 軒 奇

運 命 も 神 も 人 生 地

第 一 巻 比 命 も 人 生 も

びり びり びり びり びり びり

ナヒハオの 命 は

ナヒハオの 命 は 創 の 心 夫 に びり びり びり

と 夫 が 信 託 した 命 は びり びり びり びり びり

お 前 の 命 は びり びり びり びり びり

こ の 命 は びり びり びり びり びり

物 事 の 命 は びり びり びり びり びり

正 義 は びり

審 判 と 命 は 龍 虎 斗 争 びり

破 産 の 命 は びり びり びり びり びり

併 し

昔 懐 に 喘 ぎ 下 下 も 生 きて 下 下 の 命 は

大 海 に 浮 け 下 下 の 命 は びり びり びり びり

幽 霊 叩 人 生 の 死 面 に びり びり びり びり

痛 し 下 下 の 命 は びり びり びり びり

又 命 は びり びり びり びり びり

春 命 が 命 運 を 命 運 びり

0218

FEB 1 1928

昭和三十一年二月

文学界の発展に力き、文壇は活々

故郷を夜に夢に見て、いよいよ坂田氏来り

文学界の盛況、美観、

心理学と詩と有機的に結び

死の一息、郁念、無念に数り

心交、統一の事あり、死とエハクリン、年い

ウラスキーを飯ん、ナイヤがうに死にたい話

シナリオの話

謂所、へうせうの事も百以上の脚本を書い

て、脚本家の内幕を聞く

映画化が脚本をめぐり、話の面白く、有る方

題、材料がうた

フィルム、デパート、話やヤスリ、や、脚本、映画、脚本

等々の、脚本と脚本、表に生きた、や、話を

聞く、脚本、またまた

脚本、脚本、脚本と、女の顔は、珍、またまた。

脚本、脚本、脚本と、女の顔は、珍、またまた。

19

2

C

...

1

7

1

747D

腹部分割已畢在舊左見左

健康な人は
思ふ分
一尊さぬ
死を覚へた。

夜

内用々々見之

事に~~反~~りて
 僅かに
 萬に
 運外
 知く
 毛ん
 保値に
 二
 入す

事
12
~~次~~
11
12

僅外 12 个 七月 佐右

畫
—
聖杯の
フラウクリンと
N
メアリの
心
白文事

かきふたのいんせう

夢父夢た
たか

と本を思ふに内田先生の
契機が話を止め
たのた

① 田之体積物語

① 法學の交流の長篇小説の書けよう

以係等代、辛業等の故郷と下宿屋の娘と其母

度 1
——
賭 賭
1
要

女の体像

百姓、
而即等々、轉世生處

日東人會新事

鑄山生後會計

文同生於人者一

收場生14人
格1

世の人々

感謝するべきものは忘れられ

かたがたのものは人達の証の如し人多う證に就けり

東の土を原も 男も女も此の世に 常におるものなり

（私は）殊にた 散るを冬に ぎくす 花の散るは 春の来りなり

私は 悲しき 心を 持ちて

昔 喜に おひて 若は 世に 命の 火を 抱きて

叔 母 姉 妹 は 女 也 を 為 大 足 に 心 を 解 け たり

私は 新しき 小川に 心を 漂わす

（私は）水に 浮き 小川に 心を 漂わす

世に 生きた 世に ありて

心は 心 ありて 世に 生きた 世に ありて

世に 生きた 世に ありて 心は 心 ありて

（私は）世に 生きた 世に ありて 心は 心 ありて

（私は）世に 生きた 世に ありて 心は 心 ありて

（私は）世に 生きた 世に ありて 心は 心 ありて

（私は）世に 生きた 世に ありて 心は 心 ありて

（私は）世に 生きた 世に ありて 心は 心 ありて

（私は）世に 生きた 世に ありて 心は 心 ありて

（私は）世に 生きた 世に ありて 心は 心 ありて

（私は）世に 生きた 世に ありて 心は 心 ありて

春と秋の運に
た街に

あつたはどうか

どうもかたがた

私はそなたの情を思ふて

世の流転の人間の生活のたまたま

性慾の衝動が加運に増やして

今では愛の苦痛を
のまが

無情な方性になんて
いう程も

悪疾 憎念が燃つて

この境こそが

私はこの苦痛を

私は心に

僕は性慾の衝動を

生ける

身は

足る

赤道直下の山

私は悲えて

詩
和
子
之
精

田中 弘

SHI 18 3E 詩

和は子(生)の二重

二二 牛命

人猪の宮

大地 車に
約め
言
10言
5を

大空に鳥は
自由

3. 又 漢方 25 4 9 10

光りと機^の其^の其^の其^の

大陽を回す物

大町オヨサを特々

十
無
阿
陀
一

2h
= 2h

被
 等
 9
 4
 7
 2
 7

子
子
子
子

4
女、
又
2
同
2
カ
の

和宮を以てゐるのは

志んふはひさし月々進
はかりてはなれたる

骨を折る

きーと ぬきと まうと ころあいのちや
はこ、誰か、事の人や方ふ

ふん自動車の車中じふんははーた

阿部宗平氏に

前田君へ

マキシンの

穀 踏山 銀山の

話です

朱筆になつてある物とさうし力入る

夜 ^{マキシンの} 十言

口語形姿の書本に

山形寺古本堂に手本了

知今一丈 ち田宜るわ田伊月々に

書キ

つまの 一の 筆の ぬき 歩 杖を

頼文

晴あけ

川口氏 猪酒一びくもる

直井 山形寺かく一歩

忌
子
未
申
酉
戌
亥

新は彼女を一番愛する心で勇に植える

糸は秘め意を愛す。

結ゆは 甚るに 春の 錦手を 裁じ

會社の乳牛に
脂をつけて
たてた

永代無印美佐結めちまゝ

和
は
雷
に
射
る
意

泉々々
此皆木了
西雲從
在佳

香臺の純
學存
契を會
ふはめ

新
美
難
高
左
急
了
了
は

毒人の多量摂取を容れず、教勅を破る。

和石 和石 和石 和石 和石

力の働きの
に

西澤の足跡に於て創

さあ、い
なむは
心
の
奥に
^{秘す}
〜
勤め
す。

和の精に春の魅力に惹かれ

と
カ
^ハ
ノ
タ
ニ

子
母

己子
子
春
下
木
子

詩 潮

0224

口語 變々 諸君 短歌 文藝 雑誌

この雑誌は、
文学界の中心に
あり、
その内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。

時代を反映し、
新著が、
生れて、
得る、
不可
能な、
もの、
である。
その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。

その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。
その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。

その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。
その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。

その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。
その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。

その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。
その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。

その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。
その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。

その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。
その、
内容、
形式、
ともに、
新しいもの
である。

七

而欲生智燈上特註下

と考へて来たのであつた。

(五) 之 子 在 一 種 新 式 的 下 方

是れは
 此の
 言語も亦
 自由
 輕便に
 用ゐる
 こと
 なる

二二 永野 北隆 以泰 比倉生 以の 生 五 五 也 也 何の 二 八 八

草子
懐
做い
~~た~~
解
師
日
と
と
現
人

藝、文学、教育、政治、経済、
 社会生活に及ぶ技術、
 傳へて藝術として表現

キヨコ

白色の丸型乾餾
金の制限
これをも
立てす

短、女、子、也

世間の
大いなる
喜と

公下臨
解之
有也
所也
推也

七〇八
 幸甚に、
 毛院
 立佐
 大
 形

美ふく 藤原氏より 口話歌の元祖と云ふ〜 歌代比等人の心の起に包

21 女へビ 折子 2
海客 友

太初少君書

カウカセの人も

和歌野郎の大通うをあらう

人生の野郎

三つの笑ひ顔

虫妖聲をあらう

虫妖聲の白身柱にうつうつ

やまを達しりうつをあらう

たろやうを達しりうつをあらう

意飾りの魅力で人をあらう

短きスワトから人をあらう

船をあらう

涙をあらう

はくをあらう

スローアをあらう

キウをあらう

キウをあらう

和の心をあらう

川の大船の心をあらう

和の心をあらう

和の心をあらう

和の心をあらう

和の心をあらう

さるめ 一 棒

棒を握うたさ、

私は白を吐き出す

血は棒の白に交す

棒をすく、しまった

血は乾いた

おまうさういんや 事をあまうた

血を裏でる

破綻 左

半分の 心の留息を絞り取、やうに

赤い血を吐き出す

もてをうた

この 血はもう白くしめ

1 2 3 4 5
A B C D E

1 2 3 4 5
A B C D

私も泣き出す

1 2 3 4 5
A B C D E

1 2 3 4 5
A B C D E

1 2 3 4 5
A B C D E

1 2 3 4 5
A B C D E

1 2 3 4 5
A B C D E

1 2 3 4 5
A B C D E

1 2 3 4 5
A B C D E

1 2 3 4 5
A B C D E

言、途中の美事の如く即ちも遠くに

神は余の症を治め

手も~~神~~を~~お~~す、~~結~~、~~未~~天に

死の詩、~~或~~を~~遠~~する

死は~~暖~~の~~中~~に~~流~~る

流る

す、~~心~~の~~吐~~き~~出~~す

心の~~死~~、~~心~~の~~死~~、~~心~~の~~死~~

浮き~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心の~~心~~、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

心、~~心~~の~~心~~、~~心~~の~~心~~

牛地極

春の日にさうしては大道に踏

馬の来りを見

車輪に蹴り又了散撒

悪臭を蹴り散撒

悪臭を蹴り散撒

悪臭を蹴り散撒

復白ふかく連走し来る白馬

女の地極

春陽にたふさくる馬を乗る

車輪を追ふへ大道に散

悪臭の花

女、後、道かに連走し来る自動車を追

膝元を隠り接ぎつて胸の奥に現

水鏡に春を映

我は虚空に手を振りて瘡毒を撒

FEB 23 1928

0231

0231

難

春の糸

少きも 未だ

蒼空の深さ

四つ目を張る〜屋敷くも伸ばす

襖の目あたりは壁の隙を縫める一場

我が身を縛る糸

襖に 襖を破る心

天窓の瓦の頂上に限る破片を合せる

糸を 糸を

糸を

春は 糸を

ユークリ樹の先端にやま

春は 健康を

今日の三雨の後

私は 糸を

糸を

糸を

糸を

糸を

0233

0232

FEB 24 1928

初まじ

一本の山杉に

隣永の松の林に心を遣(おも)ふ

脇に生(な)る金を流(なが)れず 遠く庭先は

車(くるま)に運(は)り 朝(あ)す 松の根(ね)を 泣(な)けしむ

春(はる)雨(あめ) 詠(よ)め 詠(よ)め 詠(よ)め 詠(よ)め

姉(あね)は櫻(おう)梅(ばい)の如(ごと)く化(く)れた。

手(て)

数(かず)

求(もと)め

和(わ)は未(いま)だ見(み)えぬ 湖(うみ)心(こころ)に妹(いもうと)の影(かげ)を 求(もと)め

里(さと)の町(まち)の町(まち)で白(しろ)くはる

今(いま)六(む)年(ねん)の秋(あき)を は上(うへ)の空(そら)に 投(な)げ

路(みち)傍(わき)に 勝(かち)つて 朝(あ)す

電(でん)掛(か)り 松(まつ)に 印(いん)を 押(お)す

汗(あせ)を 着(き)て 銭(ぜに)の 口(くち)を 掃(はき) 憂(うれ)ふ

姉(あね)の心(こころ)も 越(こ)え 庭(にわ)に 咲(さ)く 子(こ)の 聲(こゑ) 在(あ)る

和(わ)は 弱(よわ)い 憂(うれ)ふ 愁(さだ)む 来(き)て 暮(く)る

まはる 方(かた)る 方(かた)る 方(かた)る

初(はつ)毛(も)の 花(はな) 散(ち)る 散(ち)る 散(ち)る

いづれ 花(はな) 散(ち)る 散(ち)る 散(ち)る

子造が等々かやがやとあつてゐる

峠の道路向ひり寝もやと来り

仲よくあそぶ人だ

結婚生活はきつてもうたう

僕も残り道を歩つてゐる

侍従名やう人

黒土の動が鉄の先端にえぐれ

牛の尻を鞭つて男がけを城こゐる

や蒼きに喰つて左分か

横を平の上に三つばかり

おれはめり喰

皆ゆゑ水鼻を城とて得帝を^{おん}はうと

或る朝は大八車を乗あふた

夏を頼りて毎水浴せやり田にうかふた

或る日はあつた

お前は丘を頭をなや

おれはあつた

おれはあつた

おれはあつた

おれはあつた

0237

0238

讀書

舞臺の先端で満月が二つに割れた

矢の巻、彼女が誘惑さ本たんだ

私はうしろも同じ場所に佇人びを木めが
 2. 4. 6. 8. 10. 12. 14. 16. 18. 20. 22. 24. 26. 28. 30. 32. 34. 36. 38. 40. 42. 44. 46. 48. 50. 52. 54. 56. 58. 60. 62. 64. 66. 68. 70. 72. 74. 76. 78. 80. 82. 84. 86. 88. 90. 92. 94. 96. 98. 100.

和の舞、しある
 市を舞うた

ワタハツハ、さび笑うそはつり左りのか
 勢をさうとと舞場だとい

手つまをひききりこびり
 和の舞、しある
 市を舞うた

酒を飲んで、は舞臺を舞場さやれ
 もっと、舞臺の、さび、は舞臺さやれ

和の舞、しある
 市を舞うた

短篇創作上
置了
聖誕日
置了

松野研介 詩

紋
氣

短篇小説を一つの藝術的點を持つた

完全なるトリキを構成しつゝとこの文意を
停にます

信にます

糸、
18
杉野
林
樹
等
之
言

吾は短氣少知理諒は根柢之薄弱なり

全形に
並
下

其の一食と一食とをいふに五等食と云ふは其の食を
 五等に分けたるをいふなり。其の食を五等に分けたるは
 其の食を五等に分けたるをいふなり。其の食を五等に分
 けたるは其の食を五等に分けたるをいふなり。其の食を
 五等に分けたるは其の食を五等に分けたるをいふなり。

人び屋たう、
エタキの食に
ヤキメに
うり

酸
 を使甲_{たの}で
 寂染_し直_し通_す
 一
 食_い
 好_め
 る_か

否
中
毒
を
治
す
に
一

7 煙草をやくところだ
いふとス
柔道
昔を食った詩を耳に

ニクとス

五木造

昔を食つた詩を耳に

時だうたいで、まはさき
あつたりは、おれ
また人たうた。

久
神丸を三
錠^錠を
う、こ
（^{かろ}下^{まへ}を）
一
種作直持の

ゆゑに
京松を
寄、新に
解す
とて

何の創作を君に乞ふ
頌ふ北条にふたゝる

前 西 77
ライオン 在
環く

平定

春とはいつ

風邪の病

暑中に病生は

三月の風邪を擽つて

せめてひと夏の間に家を建てやう

わが心幾り鼓動を擽ねやう

汗にまつた背同着を擽て

雨より月には数度友を眺めたり

儼り身を固めやう

何となくか と何となく

完全な

昨日の私は今日には訛やうやう

病と胸の痛を ~~なぐさめ~~ しのめやう

此を去る 追憶の手を擽る

思ふに ~~なぐさめ~~ 懐かしき ~~なぐさめ~~ 懐かしき

わが心 ~~なぐさめ~~ 追憶の手を擽る

三時の夢の中に 鏡の裏が

かたが ~~なぐさめ~~ 懐かしき

現世に ~~なぐさめ~~ 懐かしき

なつて ~~なぐさめ~~ 懐かしき

いつにも ~~なぐさめ~~ 懐かしき

書く ~~なぐさめ~~ 懐かしき

OK

夢の骸子

さへひきかたの 幸道の七がまます

万葉の寒土に 夢子のすまなれども
ひきなさい 柳の 遇 然も

なみふ 指後の 上に 甘き 夢子を 括ノナリ

幸道七が 柳標に 夢子を ちえぬます

和は 柳標 とを ちえぬます

人 ~~柳~~ 柳標 夢子を ちえぬます
運命は 柳標 とを ちえぬます

運命に 夢子を ちえぬます

白に 夢子の 夢子を ちえぬます

感後は、藝術にはよい
影響がある。海軍の
芸術は、よく育つ。

[illegible]

トスルスキカ ツリ方イモ 蘇大ナ 菱折を主人
 栄々々ハ 成俊主義イ生イ 吾^オいハ友ハ
 吾^オ高蒙^オ勢^オ生^オ 珠^オ規^オ方^オイ^オ

成信を義は 失望を信也 甘薩勝の元 牛五徑路を尋て又、
 くり 悲し一書りかくぬめい 成信を義と 謂ふのじより

人曰心 智識や理諭を前に、平身任道し、是れ之に抗するべからず
是後古義を以て生ず。平心静慮し、春の如く是れ可有人を生ずべし
我々の体験を以て古より今までの成敗をや、言ふべし

[illegible]

成候 主事 候^ら 薪 後 生 本^の 方^う
 邊^の 入 事^し 本^に 瑞^と 方^う 子^を 入^る 至^る 感^を 便^に 主^を 觀^る 認^り 了^す 時^に 候^ら 本^に 候^ら
（に 乙 上 下）

物事のそのと真相に就て観る。一のは白紙の紙をたいて又くても
 よして其様世に接するに白くを其後の書面を成るを達し
 空しくすゝまなくして感信主義より生ずるは信執意を有するのみ
 其信に接するに支配されし其信其意あり信執意を有するのみ
 其信主義より生ずるは信執意を有するのみ

山川牛のゆく

山川牛のゆく
山川牛のゆく

運送するは能く下には限るぬおもふ

心算説明を
山川牛のゆく
山川牛のゆく

外角のゆく

度位と新の芸術利便をたす所は度位のみ面行きの所定あり

すてきには正しくなり

何れにせよの明瞭なる事益や我々の眼前にあらざるべし

統一の心算観察は全眼を（通）して現れし批判新を動かし其の心算を以て子

第一の内面

その第一にもみ識し居る事何れにせよ

感傷（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

（感傷）はさるる人々には（感傷）はさるる人々には

岸澤代名 桑畑山御用 訪日了り

僕に最近 沖尾高野と 甚濃庵に居て

あると信ずる ちやうどが 余り明白である

故に 岸澤と 甚濃庵に なるがを得た

西澤孝仁の 徳孝 併し 善責であり 生徒の道だ

我々こそ 故に 醫者はしきり、 要は 父あだり、 余た

病も 者は 元々なり 故に 貧乏ななり

富乙 者は 幸なり 故に 醫者も 使用し 得るなり

岸澤代名 雑誌をなす

語は オムヤ人を 受く 大學生を 受く 又田々人の 道徳

を身への 手紙の 表現なり

既婚者 一様の 異性 対一の 心理に 對し フラフラを 諒に

盡す 性性も 心理 解剖 する

一 恐怖の 二 理想 對照の 三 性性的人格 現感 一 等々

に 言ふばかり 議論を 讀み 書き 道徳的 類案と

婦人の 女性性 聖性的 行動なり 此處 漢語 潤性を

云ふなり

夜 昌西外 又 来り 語らうと 語る (おき新文)

夜 桑畑山 市子 14 勤に いくをす

侍生 来り 社人 一 書

サーン 劇場に行き 夜は 豊一 語す (おき新文)

おきあがりなうー 睡たいなうー

おきあがりなうー 睡たいなうー 起きあがりなうー

仕事着に着替へて見ると 和む

池田を訪うまで こころもや

浅野さんへ 居た 未だ 臥す時が しまあめ

昨夜の wings ー の活動 宮城へ 思つて きた ー まいり 生まれて

舞和と 雪ふり 雪ふり 僅かに 髪髪を 言わう 春風だ

朝が きた 自動車で 朝の 光を 見る

窓の 二重を 下り 山野君の 筆を みる

窓の 筆を みる 筆の 光

この 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

雲の 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

この 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

先づ 美人を 自らの 筆で 描く 光る

雲の 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

雲の 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

雲の 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

雲の 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

雲の 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

雲の 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

雲の 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

雲の 筆の 美人は 足場が 年を 経て 光る

三月七日 水曜

八時頃仕事に任じた。

四時半に歸つた。

夜松本も雪もやまず、新大工野。

山野も、詩集も、稿も、整理をす。

此頃、三十歳を過ぎしやう。

出版の目次もよこし、後二三日のあつ

たう。

オ一金も無いのは、ほんとに困る。

アチヤコも食つたのか、に、おのゝけが、びーん

と鳴りかた、十五分書きたう。

毎朝十五分、こすこす

と五十分、には十日目。

山野も、達筆にもなつた。

三月十日 日曜日 曇天

昨夜 四維日主催 本如延園會の傍聴に介して

石川 操の講話を聴くやうな。三度聴くやうな

信の聲も耳に知るやうな。博識上から意を翻す。

三條 輝子氏は 月夜相に大失態だうな

場外を心算して居るやうな。あやうな 朗讀 演説 になつた。

十時 平賀 歸り下りて 西郷 吾を

そこで 詩の諸義を以て 時目分ちて 一々 描寫論と

叙述論とを比較的に 説明してやつた。

雪原のふは 中平 在

朝九時半 會場へ二週目分ちの 靴下の洗濯を

靴下を 悲境は 洗濯タンの靴下はありだ

ナナナナ 斜に 指道して 道の 書を眺め

詩情を十五篇を 絶稿する

夜 四週目第三代が 来訪する

此は 自己の 体験談から 喜劇 白話 何の 夫人の 忠告

事件に及ぶ

夫人に對する 此の手紙 喜劇 何の 夫人の 忠告

振りを 舞臺 聴す

又山 歌を三人 又とボリタは 浴衣 見物する

祇園 互事 劇あり 白人の 心算に 一乗 運ぶ 喜劇を

得るやうな

彼等 平賀人は 信の 喜劇の 何れに在るか

三月十日 金曜

大儀なりし時等々 原稿型にれ教をいふまで
仕事は行方不明。池田君には腹をいさへて聞かした
午前中に千石君の友に
昨日批くもたし僅かに二十五等の改作にみせぬ
高橋夫人と相成状が事を何とも明日の夜、夜の金言を
持たうとはさるく愉快は過ぶといふ知る。
免る争ふし事に迄事を要した。

昨日は

ロエナイテのロアーテストに片断見れり オチをまだ草紙に
不中と云ふ。

マローというエルのメロソリにまうし片断にはびくりました。

三月二十日 火曜

山崎君の神託 詩神送る事。

日曜日に草紙型をまうたも

余は草紙に新代巻佐々木お姫 武井夫人
左様お姫山崎、弟とレドにう向ふの、毎に何に
泳に金言談の趣を行す

夜五時半から (十人きり)

高橋どくたのみに相成りし。

有る日大曜の

三四日に渡り降雨もどうやらあがったらしい
前村君が密入国で一逃がやちの心 其後に僕は池田から
頼まれし可なり多忙だ

原田君から手紙来たぞ いく文藝雑誌開業のあの
珠樹君のはおし告へと女権にまつた一

そで僕は正當な主張はどこにもするに書つても
加川文一君から手紙

五之日和病院生活をしたと 珠樹君と論議はつこ
一言一語を書けぬと書つてみる

五村美樹の文に不平を述べたが 往々故意に傷
けつてゐることを書こころ

詩集と 雑誌板す 車にた

詩集 何處に介く 其の意を

移り也 詩集のオ 夫がよる書ける

少年軍人か今校正中

一冊二冊と 今の目録をみるべ

夜うやい 併し書する

松井珠樹の短編 春の庭をほむ だれなり

苦力

死面にみなおる春雲を

工場の煙突にえくくも

黒煙を吐く心の蒼然

今日も忘る

明日も忘る

何となく行く 夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

涙もどく人泣く 夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす 地下室に

土土 夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

三月二十九日

四月

退屋 退屋 睡むなり 二十五時分の 退落

夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

カナリヤの聲に 社やし 夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

静かなる 世の春に 心く想ふ

悪の念頭に 女女 我れかり捨て 夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

街頭 金人 聲

うゝ大地と

旅人は 旅の意を 夢天揮 弄く丸い 涙をこぼす

0001

MAR 29 1928

000000

神の平和

ワワサ

ワワサ

ワワサ

人波

砂塵

颯風

労働者、労働者よ明朝の輝を要せよ

ああ 腕をふりて 輝を要せよ

ワワサ ワワサ ワワサ

建物 自動車 工場 煙突に

おや、心の距離を

目前に迫る地平線の闇を白く

朝

心を揺るぎの運を手に握る

佐等々 朝 憎みの花を見せ

大地のゆききに 白く歩みを構へ

今宵 一片のパンに 甘き微笑を交へ

ああ エターナル コアトーン

神の眼に かけ取に 拙上の薔薇は 書物に還る

ああ

おや、人類の左下

大海の蒼に 母線体を認めや

サの日

第一 結び かくまいたる

夜を待てし

三五の星を 一持ち 暮る

曇天に 微かに 持ち 暮る

夜は来る ついに 行く人か

け田節三々し しんがきき 前田村のききき

四
二
日
月
曜
日

吾人は善悪あるを
 知るは解りた
 僕も悪人なり
 善悪あるを
 知るは解りた
 善悪あるを
 知るは解りた

母恋

沿田行平君
寫實の神現
うたひ
と言ひ
題は詩を
走し

高年
 鬱念のな 情 障を 人道 思ふ 君よりるをけ
 了みだけに 我々には ものなうめ

生息は
 懐愛
 本毒あり
 白蛇一匹あり

更に新院員を新に選り
一歩進ん心
を統一した。海合の
白粉等を備へ、製造して
るもの

生ずるのすまに
 書かんとす。か
 つけおこ

日本では下ノ端にすおぬ 役者又事りて
入場料 三割七丁五 仙とはじりた
人を喰つてゐるにも 経てゐるなりた

事々事々
事々の
孫
じ
ち
方
い
者
今
陸
海
軍
の
一
部
を
統
制
す
る
の
為
に
設
け
ら
れ
た
機
關
で
あ
る
。

大井田 萬牛をぬけ

[illegible]

一本の柳

（来四）

留へば猫でもありすた

介を驚く時 是電筆の介をこころへるなりけ

ハイ

どいし映なれな来く（出来ませう）

武よりぬ野鼠となりすた

うぬなくとも

はワ

チイズの白を慕はなれ重宝ありませう

今は唯

まわりの物懸はたのしみなりて人々の心を
あつむ牛ふたりに傷をあたふなりめと

一本の春柳

流は糸を数々ひんて

キリハイ

糸は種を垂れ

己が糸を斗きおめやうとこゝるます

四月三日

道來の重も朝にかなは降り上人

野方無し 清君と縁にに 甚やう方々も

キヤンヤに 飛来す 朝七時平

山田君へ 金又し無きなり 白痴に言ふ

可言想だてても 可き思ひ

APR 31928
00 03

四月四日 水曜日

雲が晴るに仕事も 丁すも大氣を 昔の因り
讀書よりたりのたか 僅か、六時頃で歸る

余信田政君のた 日平に送る、いもうた

詩壇雑誌 多田一朗

山野君 前 田君をホメてゐるだけだ

資が少く、いり、みる、いり、休養、た、もの、た
金、あ、た、一、目、も、

こゝ 自身の手紙を、あ、無、も、は、た、か、
厚、い、の、理、院、に、来、た、い、い、詩、身、予、信、送、附、の、書、か、
一、方、解、る、め

こゝも 金は、前、日、多、五、十、円、か、も、も、り、た、

さ、て、有、か、鏡、映、た、た、然、と、な、い、假、取、い、こ、る、

明、研、方、頭、脳、は、う、ち、き、い、限、う、た、

又、田、さ、か、島、う、ち、か、行、わ、い、ど、ほ、い、き、も、急、を、入、る、た、い、
で、交、り、た、す、か、た、

可、研、手、は、使、の、詩、を、載、え、来、た、う、た、

筆、澤、氏、宅、に、い、今、選、行、さ、た、く、も、五、い、し、

讀書と

愚、筆、の、矯、正、は、今、必、要、だ、い、

社、中、より、我、に、信、頼、を、さ、す、い、

ふたもあやうが 我々も此等無き上に立て

あるを主張するも其二義あり 其うち中の

美ありつらおも才一義の如きなりと云う主張を才二

義も才三義のせりこす 藝術を要する

これを 我々は 新現象と各務す

目的を 義にあらざり 其主張は 才二に在るなり

高の主張の如く 藝術の才一義ともい

たは

~~事~~

一言

二刻

三繪

を思ひ出しの 主張に於ける

このうへ (一) (二) はより主張より 其分 雲の如

き才一義の如く 藝術とす、方大にあり

この要するを 文藝にあらはれり、一 才二には

藝術とす、在るに 藝術を失ふ

和文を主張す 新現象化は

才二の如き 何なる現象に創りた

高の中より 美を 受く 創造するにあり

高の主張を才二義とすものとす

胃之曰
金曜曰
皓天

頭入
何人
やうに云ふ
詩も
文も
書けぬ。
睡たい事
あひて

7. 日

酒を饌んが母の徳を
祖を敬ふ

と、七
勉
一
七
五
手
や
女
鼓

才
睦
久
たぐく
顔
の
や
大
勢
を
敵
に
あ
る
や
う
に

ふへは
句也
七
五
八

前田に五十ありたる
詩集の保証金に
送付せ

浮生抄
一たろ百。三。第うあてくく

前田は、
百七十五万の現金と
十ヶ月の十万のテーク

で
スチューに
バーカ
を買
つた
二十四年
改訂の

振生七坊二
あを毛
拾うもの位
には
くたう

木
要
要
要
要
一
本

勤王者の不佞乞ふ鬼蜮へーたまり

正下
新
題部の
金印を
括弧に
くく
る。

心藏の筋の十二
全身筋の十二

女
こ
う
ご
う
み
た

ひ
山
郡
君
之
其
に
リ
リ
一
イ
ス
る
を
送
る
事
に
一
た
る

山 邦 吾 は
と

義父に招かれて下町に参った人達を市外へと

1104 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

五師に
十の二
来た
經文を
て

オーラヤ 僥けを喰ふやうた。

いそぐを呼へ行く
心は白くしにたて

戦ふの夢に

死んでゐる 息

ほつとに結ばれことけや ~~有~~ ぞ ~~惜~~ のちに

まふや

~~あ~~ えは人回ひあふために

勢ひなり 日の暮る

新若き心の 弱るよ

意美に 力に

~~付~~

今 戦ひに 負き女と背に

心は白くしにたて

マニマオーを呼へ行く

心臓の真白さ 顔に

白百合の花

彼女の 花言葉は 刻み

其の 花の 名を 刻み

白百合の花 名を 刻み

少女の心 コフ コフ コフ

白百合の花の 名を 刻み

白百合の花 名を 刻み

APR 7 1928

00 05

APR 7 1928

00 04

胃十日

昨年言橋松大醫局にうつて今年も鼻音の横さは
大目圓びであつた。實にその時既に蓄膿症ではなかつた、
僕は始めると心却て診察たのだから、醫者に見解
の余りに無逆位ぢた。

年一、年終には一ヶ月も其費用に費したるに耐えた。
物方々も養生したるに信じた。鼻が、

一文も無き今日一層悪化して頭痛三回するにまた

毎日、鼻が前額、眼の裏の中間、鼻根、擧げ

あゝ痛みに耐へ得や。耐へる直は、や回りの言に

死を志す。前途を暗く、嫌な生活の一端だ。

金なくして手術は出来ぬ

生央セーの信にゐて、今日雨降す。事は醫者の

誤診と悪化を意味する。鼻の病の言は

的進行状態を物語す。

僕の生機を支配す、その一、大痛は

蓄膿症だ

金なくして何を事や

金ゆへに、金かかりしに

父を病み、金なく病む、金ゆへの病は、

母の病、仲の悪化なりや

諸に生きたる言は

詩は死に、神祕を充たす言は、

白雲の念に白くも難うなぶる　　自分け余りに無謀であつた
前途を顧み身の余りにも程気のあつた

喧嘩はしきない　勉強もした　創作も　詩を書きこいた
心に隔さる　笑を涙　うす　事　の出来やうなもの

噫　今は　過去を想は　何も書きなかつた　唯、恥
かゝる　思ふになつてゐた

昨日書いたへ　今日は　扶男をかり　不機を賣つた
進意の過程と言ふことも　未完　未定　死　一　清く
のかう

他人の作を見つ時、自分だつた　けの點は斯う書く
たか　と思ふ事も　まゝ　地評する人は
すゝ事も来るが

四月十一日　水曜日

夜　ヤブス　い　居た
新田より　即ち佐藤文之　支那を　宛子

新田より　女性コレエ文之　か　一新記を借る
た　とうた

面白い男だ

田中春幸　毛　加山　ほ　を　来

春幸　新　也　忍　に　入　り　こ

頭父　痛む
娘に　金　五　五　十　仙　七　取　子

四月十五日 土曜日の金曜に 巾着と捲けに銀が
無いぞ

とうとう一戸の大家だ 頭や ややうに 痛む人だろ
ちやうど

胸ミシンが縫うて来たんだ どうする事も出来ぬ
算を——手紙のおは鏡は救われぬ

勉強も何も 稽こまぬぬ —— ああ いったいこころ
も 其癖が 眼以外はない

手紙父を来たるとは 悔げない
親父もなう 手廻りにたぬぬ 親だ

金は一文と無い

西部の羊つた 西のい 悔いだが

まあ故にふ人気がう あーあ 悔いするわ
羊飼さくはたんと 鬼の言っても 羊気た

後は体の困るを知る

西部勉強も下

羊飼さく 西の教習は 感謝す

師兄に 鬼の言も 理由は かくさうに
心の中は 徒は 鬼の文をためり

つか 解の口が 来たかう

其等は 徒は が一テナの 草履 井田に
は 無了 だらう

四月十五日

サアムに

ハイン

チャム、フアウ、

の

stunt angel

を見た

毒夫人、司井夫人、アノヲ、僕

得信金七十九兩、十二仙を二書。日知、じを布

四月十六日 句解士

傷き、アノ、染、アノ、目、アノ、金、に、た、す、アノ

アノ、アノ、アノ、アノ、アノ

アノ、アノ、アノ、アノ、アノ

アノ、アノ、アノ、アノ、アノ

アノ

創作

曲

アノ、アノ、アノ、アノ、アノ

四月十七日

アノ、アノ、アノ、アノ、アノ

アノ、アノ、アノ、アノ、アノ

アノ、アノ、アノ、アノ、アノ

アノ、アノ、アノ、アノ、アノ

アノ、アノ、アノ、アノ、アノ

負に
戦ひ破れし父と母の

是れ等我に遭ひし幼子ではなかり

今は傷つき、悶へ、~~絶望~~

腕脚を凝し、~~し~~

血肉は骨に境を

叫びを發せし人 ~~等~~ 善惡不良に

お前は目隠しをいしは方す事は出来な

く己の介ひ子を見据へてはすまい

この不自然な此會生はに叱はれし幼子を

白き手 ~~我~~ 我は救はるは方ぬ

~~我~~

父と母
夫と妻

子と孫を

長月五奉の日に

飢えぬは方ぬ我は

は會ひし等傷み、~~我~~ 我を信おは方ぬ

APR 17 1928
0006

四月十八日

雨は降まりし月夜は時天晴きと言ふ（ヤリ）
仕事は多忙に 随分は ありーい 手術は女おねあめ

金は無い

詩集宛へも生ぬ 期日は 迫りたるや 一週間だ

瘦れ 瘦れ 下りてく 詩の創作を 書き出し へ

それと 夕日を生かす

詩の死

恐ろしく 容易く 死ぬ

時計の音が大 きく

私は死ぬことよ

掌に染み込 んだ血を ぬぐう

抜け 棄てやうとする この詩作を

私は死ぬと言ふことよ

昨日迄 夢に 詩

今朝迄 夢に 詩

裸身 裸身 裸身

冬服 冬服 冬服

何れ 何れ 何れ

春の 睡りに 酔ふ

詩は 眩暈と 成る

APR 18 '29
0007

四月三十日 金曜日

散文詩

春の夜

鉄リ電燈の許 柵のうらやまババ、うらた、^{ま王の}心も破つ

君夢寐の心落。余に揺れる 慥にもなく 安心し

想へすうと心と ^{落し} 散りし 君藉をぬめりみる

心雷、心星、~~心~~ 無く、~~心~~ 是 ~~心~~ 春の夜に

今をえよと 華り星る 思ひなる 春の夜の草

醒めよ 醒めよ 新くき 陽が許に ^に サンドイフケの

蒼蒼の句々 常年に日を生度き 青春の心書

心を割く 心食べやうとする 教訓なる 心

さふと 心書 宣紙に 龍を 歩かぬ 青春の夢

ハラハラと 心書 汗に 不逞 議や 無言を 頼り

まわ。 續ける

想ひ 破木、画面に 灰汁を塗り、生息を 虚生年

腕を 若心か木し、頭、 頭 悔 青春 童聖な

ユーリットの上を ^{コハコハと} 引き置く 心く

憐憫なる 若者 瞳 ^{心く} 心く

古 荒粗れ 心味 知るぬ 世の 俗信者の 群

に 一日 一冊を 飲ま 去る

悲 ^{心く} 心く 心く 我が 不直は 汚水の 心く 心く

APR 2 0 1928 00 08

四月三十日

夜支那料理屋にい飯（おめ酒）の後に酔う

人た 市留置場に運ばれた

百房のおいひ解決した。

月曜日に裁判がある。いふより假歩獄だ

飯おめ酒

毒蛇

青燭と化し

めくめく心算を紙めくも

猿性の酒に酔ふ

春寒獄窓に迷ふ

冷きコウクリーに睡りをよせろ

酒気良心に溢る

狗獺家に疲れた物言わす 夕陽をさうちろや

おかみさんとワレハハハ林檎を食べる

猿股を揺る春に身が寝る

睡りたりお浪児 何處に往く

APR 22 1928

0009

12525

泣きまじうの
悲し
あに
泣きまじうの
苦
あに

[illegible]

道は先作の曰ふ勞苦と生涯に
只一つ活路を見出す
を得た心は否か、

人
は
ち
り
た
に
は
を
観
る

幸路は山の峰集りに住むと言ふ、
今後には夷新夷不

今形を引くとなつてある。た

明日裁新の行を

仕事を手早く
おこなひて
おぼつか
金は

批判的に行へ

酒の品一、金千五百也。仁代、言楚、是禱。

この金へ
田中
ところを

金三郎

十世常は協元ニ
十世は千カブス不屋の主人ニ

城

角
 新刊の
 三
 見
 長
 の
 本

三千坊のおうすか

創作9 讀其友作

一、飲食生活

五場から、越前へ、飯沼、諸戸、子、乙、

多田 / 功 9 菫 名 乙

日市
文藝
博覧
諸
博
覧
館
之
人

神秘は時代の 太陽に振り揺る

登れ性慾

進化の掃みと

鏡を三つに割

父と母と胎児は

一歩の世帯スガにすかりて

物質の大海に溺れやうとする

悲しくもわななり

夢の

一糸上に閉じるとは

死の眠り 彼岸に帆を 夢が人とする

四月二十日 水曜

モモのうアゲヤに 鏡を賣があこふた。

夜 矢倉やまを グリドサマタン 病院に見舞に行き、

木西夫人を

贈る 免さうのう買つて来た花を 贈る 来た。

APR 28 1928

0013

三三三

自然 證美を有するものは、其の美意識の真樸を
なすやうなものである。

自然を證美するとは、
自然を美として主観するは、

都會より、人工美術、造形美術を證美主観するより、

素朴な證美する者は、空想性を涵養するに要する。

ない。

唯、その極端は、常人に空想を誘ふに及ぶ。
之をいふに及ぶものがある（三三三論著）

科學の境はとりもたず、不審。證美とは、

我々時々の空想を空想は、自然證美、素樸性、詩的

節は、何の力をも、生命に及ぼす。

唯、その観念に

自然を、
かゝる感じに、

生活態度を決定するは、此の類に於ける、
現代人の、其の生活意識の躍進も、何れ

意味も、新しき藝術として、何れも、新しき

人自身生活を詩化したもの、素朴さ、自然さ。

が、素朴な藝術

が、素朴な藝術

が、素朴な藝術、詩心を、素朴さ、自然さ、
である、それは、自然さ。

である、それは、自然さ。

唯、その極端は、常人に空想を誘ふに及ぶ。
之をいふに及ぶものがある（三三三論著）

科學の境はとりもたず、不審。證美とは、

我々時々の空想を空想は、自然證美、素樸性、詩的

節は、何の力をも、生命に及ぼす。

唯、その観念に

生活態度を決定するは、此の類に於ける、
現代人の、其の生活意識の躍進も、何れ

意味も、新しき藝術として、何れも、新しき

人自身生活を詩化したもの、素朴さ、自然さ。
が、素朴な藝術、詩心を、素朴さ、自然さ、
である、それは、自然さ。

回ホウフリ

澤色

と悪臭に

誰も

つかかり

(米屋の家の人々に)

意志の力は

4百の

舞臺

師た

僕は頭部を逆

士にし

水中を泳

び

(隠された生えの野に牛は住む)

全身の関節を

ゆる

かり

グツリ

伸

びん

はあたり

太陽の

接面に

聲を

自由

祝福

世界を

羽を

人類より

ああ

熱気

水面を

4百の

新生活に

其時

僕の魂は

おら

おらフリの殻を脱ぎ捨て

たかろ 我々の苦。過るに要するものは、
何れでも、
（トイロ）

リコノ買ひもプアサトにでも無くして
テイトトメイトストア
かう買はあつた方々めやうな
必要である。

だから 漫然 著作してゐる人は
無智である。
（中略）
草。実ばかり食つてゐる人である。

それ等、人は 詩の 基礎を要する。

何と生命と 建 事を保つてゐるには 何れでも
百貨生々に
格容しなくしては方々め、
別々 経験が 必要だ。

（中略）

（中略）
戦間には 多くの 我々が
食糧を 奪は 言う 犠牲なり

衛生は、
春を 迎へ、
心を 心 にて
春を 迎へ、
氣 微 方 方

（中略）
我々の 労働は 生 命 の
力 あり

（中略）
（我々の 犠牲を 多くする）

（中略）
（今は 夜に 睡る 人 こそ）
（中略）
（我々の 目には 眠る 人 あり）

アエロサウ

（中略）
（生きたら 生きたら 生きたら）
（中略）
（生きたら 生きたら 生きたら）

（中略）
（生きたら 生きたら 生きたら）
（中略）
（生きたら 生きたら 生きたら）

0012
APR 25 1928

五月一日 月夜

日曜日に 叔父で田頭牧師の執務を賜ふ

午仙 日暮人雪の天長年四つうり

中り雪 戸田雪の草雪の雪し

夜はニ会 市事 併し 叔父に 龍文

月曜日は

杉本茂雄に 不 譯 劇才を 荒形しす

五月二日

今那 劇華

メーデーのうり モーサがアレンサを見送り

五月二日

山形君に 仏 預し ぬき 山崎君に 送る 安ん
なかつた いふに 山崎君に 任した。

辞 変な白人の 死 真に 同 備りし ころが 勉強す

お笑が ハイスクールの生徒だから 英語には

眼をいとし 症を せし 軀を 久し けやクニヤに
なるやうだ。

傷くのは 意義も見えすの 田 難 だ

あかひ

我が生活を識るものは
ふくろうの眼

岩石の重きをおし生つる
闇の閃光

闇の閃光

千百の足を観るものた

愛 意志の重さに

我の全身は
腕と脚の交

魂なる我が相対の
閃光を待つとき

脱木よ
生るの重き
花の重き

能かり
徳このもの

生るの重き
花の重き

全身にまとい
我の重き

足は生る力
腕は幾時のもち

我に
友よ
まじり
はまに
魅う
れたる
死の面

全身をこめ
剣を用いた

土中に陽光を
まき入れ

（一瞬）

おあ
地上に
跳ね
躍り
生ぜん

四百の力
脚
不思議なる

曲節の

新

長恨の左眼を
しるは

生るの重き
花の重き

生るの重き
花の重き

生るの重き
花の重き

APR 5 1928

0014

（印）

偈善者

眼に見えぬ香り 氣味

その威也い その香りなき花

我は造花の香を覚見たり

艶に 歡喜に 大輪の紅に

輝けい

眼に見えぬ氣味

その氣味なき 造花を

しかう しかう

一季の色あやたる路傍の名もなき花に

我は造花の美を覚見たり

偈善者よ その香り その氣味なき花を

かや かや さはさし子を

空に連来 ~~来~~ たりしに

海は どうどと 叫びをあげけり

三才の子は 瞳れを見はり

波 幾つし 海の面を 望み 視たり

APR 6 1928
0015

五月雨

（朱印）

晩春 心の狂想に倦み疲れたれば

心 心の純情を奪ひ去り

幸 幸いししか我を見失ふぬ

雲 憂愁を運び来て

五月雨の 五月雨の 五月雨の流るるの額に注ぎて

街路の黄昏に生活を追いつめらる

芳若の瞳

父逆の呼そを響きけり、瘠したる足を引き振り

五月雨の ~~街路~~ 芳若の瞳に 生活の 戦ひのあり

老病者

寢床のやに叫び聲との目より

電燈の光輝 ~~の~~ 懐かしく響く

昨日の傷を今は癒す 支那に力なし

我は老し 芳若の瞳は 安住の永世無く

あつこのちがわつた 血潮がこけ落ちて

愛は極む 来す

銅鑼の赤錆ひしうなりよ

我は在りし日 我は青春の力なしに

煙に 捲かれし良き 特許

MAY 1 0 1928
0017

MAY 1 0 1928
0016

知れぬおののしを見
寿を握りし
老病者よ
天井を眺めし君は
と爲すも

鈴鐘草

~~灯籠花~~

五月は 月下に歩む 青春の影だ

見たまへ 灯籠花

己の脚を見眺めし 悔の姿

人の心に虚榮を刺す

その五月を過へ 五月送る 謙譲を

五月の感傷に 燈籠草の 下波花

燈籠 垂れし 顔する人を

襟を正し

吾は等々と 憶ふぬか

三度心を苦みかゝるは 下波花 下波花
我々 苦き日の 取寄る 草花
泥臭き 悪草を

笑ひ 導ける 五月 幾下波花を 平たり。

MAY 11 1928

0018

0030
MAY 15 1928

唯一の太陽をしまへて、

まるで深淵を駆け廻る

恥滞の詩律だ

私は此数に包まれた

（光り）

彼女を讃た
幸福を讃た

晝はは代り全部なるか

彼女の姿を

私は

（明るく）

後順も守り日輪花を讃た
其物う

雙生児の感現へて柔毛に覆つてうだる
（？）
（？）

五月十三日

母の日は、赤いカーテンをひき

ひきつてはめや

四月さく、百歩を踏み

結集の土を

に送るおみちや

母の日に

MAY 12 1928

MAY 21 1928

0019

邪心

常盤の野に枯木のおどあり

魂の最悪なるを見た

(他の戦禍に心を奪われ) 心は破たん

心は空の雲にかくもりつはる

今日も亦空手形を握めは

金の山を春を破るに遭ふ

(邪心は世に染みし者)

浸糸を糸線に連れたい

評者の感想を述べたい 評者はいかなる意見をも持たず
すか、

草花の花をふに愛すこと

とふ花を鼻骨、頬、頬、丸木等々を置き換へて

花と観くもの言うの道だ

ふれ多やの生け背葉から 花をみ生

は生けの者さかきも 花の作る生けの

00 31
MAY 1928

あゝあゝ 馳せおこす 曇り日
ふと 路行く女に 訊かふ人
ワット なきく おれた 彼女 ~~の~~ 影

春 晴ふて 赤い石燈籠に
娘は 髪を 伏せて みる
もう あゝ なりや あゝ おまの つみき なるやう

嫁入 買ふに 生きた 女は 嫁り きた
あまの 嫁 きた 女は 嫁り きた
あまの 嫁 きた 女は 嫁り きた
あまの 嫁 きた 女は 嫁り きた

産の 彼女に 憎 肉 食 した。

あゝあゝ

脇小玉 毛を 取り きた 爺 爺 田舎 木を
等と ヴィスー オジヨ パーに 遊 歩 した
前 玉 毛の スチュー パーカー

夜 物小玉 は 中 け け 君を 電 燈 心 平に
オジヨ パー ちん ちん した

三人 男 女 三 人 食 ち きた

ふと 赤い フラウを 九 針 針 した
ユナイテッド アイランドの
いん ちん した

MAY 16 1928
00 22

生葉

降りほつ陽気の中に

人々は急ぎの笑を舞うやうに街を忘れるまで

私は黙然と街の隅の隅に佇んでゐた

それは神の心もあふか ちまた

うしろの心も堅く 世帯の聲を聞かぬ

花を散らす心も 街の隅をみた

射撃をやめた

大地の面は 赤がっつり実のやうに熟るやうに

蒼白の葉が送るが 赤の瞳のやうに 闇にいつた

私はそこに 大樹を 一玉の

花を散らす心も 木の上にとどろき

花を散らす心も

女の死を 何處に 蒼白が

私は木の本の葉が 蒼白に 花の散らす心も

女の春の葉に

私は愛を 狂ったやうに

私は 花の散らす心も 狂ったやうに

私は 花の散らす心も

天の神を 花の散らす心も 大地を 花の散らす心も

MAR 23 1928

07 23

一握
24の
3
常
甘

20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

今日E市
臨時在
海(四)
12
中
12

傳、功、く、事、怒、我、事、よ、
す、事、成、
4

イ
カ
サ
リ

種
久
長
力
を

舞
一
途
に

そのうち子きい
心の中
うしろ

心の庭に花を
咲かす

月 日

金中病
夕野ほ
にを
救め

予左に、~~予~~ 其の
 所愛、
 他の上に降るはき

五月二十三日

文藝學論文、市田 昭雪氏にあつた

山部孝 早稲 信心 未だ 人々 非直 之 多 かつた

上山人物
佛像之
割佛像
及云持

伊藤夫人の死を悼む
 伊藤夫人の死を悼む

家

頭の中はまるい鳥がひまわりのように
花を咲かせる

今朝は東晴の
葉たふらふ

又僥の諸侯に

今日所
録
ヤ
三
思
及

言ふかりた

五
二十

清小峰吉より手紙事
 詩書出版にたいして書信を持つるは残金を早く送
 束に既に送附してあるから
 今後は年中にあうだ

曇天に心を養ふ
 散り行く花を見え

幾多の影に
 この陰接する春の情景

つらやうく心を慰めこは

絶へなく流る水も

今日はすばらしい天

花散る ~~花散る~~ 春風に

さあさう

幾日あすまでのあまをいそぐ

車事 ~~車事~~ 車事

今更 ~~今更~~ 車事

車事の難をいふ

た平短な夕陽を眺む
 一た

MAY 24 1928
 0025

二 節

名宛より小口の ぐわぐわといふ聲を 後方へて
 ヤッ々自分車を 降下しながら 車を置く
 大聲に 訝るゝよりは
 だまうゝ ぬくまうよりは
 この聲に心をよく
 思ふのよりを この 節で
 考へて 大に 妙に
 オウ 故に、下草に くるゝ心に
 静かに するゝ 節で
 くりがし くりがし、ピーエーピーエー
 こゝろ 節で

三 節

庭になつて 勝手 吾 柳井 仲村 氏
 4ヤダスイで 金一 別 節
 勝手、柳井 氏 等々 談話 後方 等々 や
 よく 節 節 節 節
 柳井 氏 は 始め 節 節 節 節
 中 節 節
 勝手 氏 も 柳井 氏 等々 節 節
 等々 節 節 節 節 節 節
 三 節 節 節 節 節 節
 柳井 氏 等々 節 節 節 節

MAY 24 1928
 0026

三 節

惚れ

思つてゐる

思つてゐる

のたうち

狂ふ

血を吐き

瘡を細し

蛇となり

草となり

山となり

闇となり

運ぶにたうち

傷にたうち

習めにたうち

剣をたうち

愛の孝たに我が身をたうち

地熱に

太陽の熱に

地平線に

MAY 25 1928

00 27

岩室に湧き上つた妄念は
我が憂きの雲裏を引き裂く

太陽の太陽を憂な

この晩暮なる肉體をやさぶつて

さても懶き春の食卓よ

そは我がまじりに在る

生きたる魂の執念

手をさしあねば總ては我がもの

ああ、食はずに飽満し

なまかなる金時のは白井につけば

夜とほたり紅白のあけに想を堪ふる

健康は希望を懐りて然睡する

我が太陽 一瞬の光り方も

手みくろをよめたるは

今は悲しき不とう明

脱がんとし、のむかんとし 君はまた不幸者

不幸者の不幸者

不幸なる素人の都々雪人の

神の自白を説き終はす

定かたるの望に集る

MAY 26 1928
00 29

MAY 26 1928
00 28

市会、花

七色、鏡で人回りを反映した、
埃りと留息の、
沖は鏡の裏を焼いた、

一掃に達りつゝおさめた鏡の裏面には、
あーとも焼くも何れも、
理性も理屈もなかつた

いままゝの、
いまーミ色を侵すやせのびあうた、
この二つを、
（これはけものの、
（これはけものの、

ハリ丸木で、
半持は、
（これはけものの、
（これはけものの、

（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、

（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、

（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、

（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、

（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、
（これはけものの、

MAY 20 1928
0032

0031

蝶々

谷間ひ産心となつてゐたので

松葉の針でさされたのか

目覚めた時かろ胸がうずくやうだ

蝶々となつて野に飛べば

葉の花の白りがするやうだ

ふとこぼれぬ花はねに ~~おれい~~ ~~もあやう~~

いゝやうぼびてあつて

乾いた道路に生えきれば

向ふに花の香

何と言ふ花の香も 蝶が 4444とつづくやうだ

花は何と言ふ

燃ゆる血潮のくさるれば

胸の脈を叩きこ

合掌したるしも 雪のあたりに

あなたをたに氷言も凍入

はこは蝶の翼をまててか

深きためらひの書に記したる

身動きなくぬ惜みとはなつた

偶がたきキヤレとわいの自慢よ

真正面に見えぬ我々の心

MAY 28 1928
0033

MAY 29 1928
0034

時

愛念の綱は時に士くおれ
東に轉ひ 西に倒れ
増悪は 赤き金をつし
常善の草 其に白をまいた
空を永にたまたま 露骨よ
きり大に 下りし
今も 乾きりた 御座る
のびあね
運送す

猪俣なる肩

時の 暗れき 八月を 覗けは

瞳の光に 照らす

なほ 斜り得ぬ 一枚の キヤンター あり

片松も 貝えす

志水たよ ~~あ~~ ぼの 風景を

曾ての 日

我が 夢を 切りし ことあり

MAY 29 '28

0035

MAY 29 '28

0035

望をに閉くものを 捨すてて

眼明眸めくろは 見みる 弁べんり づうとほえす

胸を裂き 奉の如きものをまくり出せし
纖細な腕は受けやうとはせす

いかに有星の衝動のはひこ 軀からだは

おどかにも こそ 燦きらき 雲雲一

夢に 痛むを 自らの衝に當てて

我々の大腸に棲ぐとせいか

美女として 老に倒れたる 骸骨を

(細な) 筆を含め 想を 抱あやうか

集心の 集する ちか

我か 哀情の 花 華 来に

君 齋は 死の 香り 繁はく

眼 目の 物 語

ひたひたと 壁す 其の 縁う也

静かなる 睡眠に 抱かす 下に

今日 口余りに 甚く 我息なり

38

MAY 31 1928
0038

MAY 31 1928
0037

五ツ 六ツ

美しう言ふか 正しう教示か 誠信頼か
ふふふふふ 平八と打算に換へてふふふふ

にありてやうに 宜当こころえり 消えてくえり

人道のよき往來するやうにせよ

私は小聲に 神祕な語彙を 何處にすゝめぬ

底を見れば 晩晴のうらやまなく 春の光を感ずる

七ツ ハツ

不可解な 軍需 富貴のうらやまを失望せし

あつた 雲の影に 許に流るる水が 冷たい 涙水 心あるか

自然を征服 したるもの 悲劇が 比喩の 風雨に 暴風を
ふるやうに 奇麗なる 恐怖が 腹を 膨らして 来た

九ツ 十お

傷み、留め 見ゆあまきには 断腸の 数珠も 惜し
目こぼる 磨き 剣に 白く牙を 上げ ころころに
芽を ちり 振る 下ろす 花を 折る ぐさぐさ 握に ちり 振る
木を 大樹 ちり 見えた 和ら 雲を 折る 草の上に するを ぎった

十一 十二

物事の 度場も 初算の 誤も 一歩
道徳と 平和 花を 律に 支配する 余命の やうに 思へた
和ら 花を ちり 下ろす 死の 床にある 老練な 人を見えた

十三

和ら 牙を ちり 下ろす 死の 床にある 老練な 人を見えた
時目こぼる 是を 弄する 人生の 苦味を ちり 下ろす
一つの 花を ちり 下ろす 是を 弄する 人生の 苦味を ちり 下ろす

裸馬は駆り横笛に
制師の騎手もなく

闇を貫き
闇の中は
闇の中は
闇の中は

汗し蕉悴し
無き情熱の所跡に
れ

愛慕の白糸
一もりきりぬ
言葉もさ

冷たう 湯水に
暖きをためう

もきりぬ

神事と言葉を
知れぬ

休も聞えぬ
句のふが
改く

闇に疲れ
闇に
闇に

路傍の人よ
矢神の
火意か

裸馬が
つうつうと
ぬれ
動きた
また
あゝか

それは
大なり
雲に
絶
最後
の
力
な
は

おとろし

我々
聖
鐘の
聲に
深
き
響

木
葉
の
跡
の
影
を
た
た
く
跡

見た

JUN 5 1928

0041

学々本々 瞳 故舞の雫了はたきあり

憶
その
聲に
跪
き
た
片
は

廿すつき 惘や あれは

陰辭をこす
我が心
の
責
を
負
け
る

無心に
おぼろす
りす
ぶ
あ
る
か
を
を
第

今も
中
花
き
め
た

心
空り
智謀
新
善
白
前
~~謙~~
謙
は
岩
礎
に
第
上
子

白濁の毒、
白濁の毒、
白濁の毒、

日本書紀
卷之六

甲斐之方き 踏加主口 龍心はえ にも^にや^や方^方ろ

みくま、
たぬき
うさぎ
はたき
ざり

抱き入めて早く
室の中の大窓を
あけておけ

五
山
有
壯
仁
文
君
家
為

日暮 未 147
冷たく 赤き 白

鏡の面も曇る

22 奇心持こ

毒考の
水

$\frac{1}{2} + \frac{1}{2} = 1$
 上に 乾き ぬめり

JUN 8 1928
OC 42

JUN 6 1928
0043

五月九日 金曜日

勝水君と事、尋常は歸こし言ふ金持弗も加へる。
夜を詠済し列も皆人共事。
詩はお散まり一丈をたきやへと思ふ。
二三十枚の作をも書きくつもりた
片宵は頭悩みにあふはノキリた老うゝ海はぬ。
是所は睡眠不足い過重也致す。

夏と彼の道は韻律に

和は碓かに放たす、翌日こゝろ

語るには余りに後にくしなま

便みには和の語り死なす成敷

この海 この海 この明もさ

物と波あはれ憶ふ中に拾ひ出れ

和は睡眠了 砂浜に埋まり 大の玄に仰白す

JUN 9 1928

0044

女中さん、おはようございます。

船出の見送りに、送別は忘れたかたきと

明日廿二日には海師へ行くと云ふ人、お話をすす。

夕暮を待つ方法とか、思ひあふれを聞く

船に乗りあふれは、お話をしたり、お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

人急ぐもの、お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

お話を聞く

東京帝國大學教授
脇水鐵五郎博士五男
脇水五郎 儀
去る十日不慮の死を遂
げられ候間此段生前辱
知諸君に謹告仕候
追々告別式は六月十四
日午後正四時ウオル街
九三六キリスト教會に
て執行仕るべく候
六月十三日
喪主 柳井仲樹
友人 林田 盛雄
平田 露平
松本 茂里池
高橋 松太
高山 泥草
山崎 一心

JUN 21 1928

00 45

六月十四日 木曜日 晴天

僕は葬式に行く 保生は 告別式に行く
僕は喪服 弟は 夏の袴を着
情熱の詩人 弟小君の 雪よふふた

藪蔭を着て 夏小川に 足を洗ひ

JUN 14 1928

0046

長いこと 涼さに 馴れてゐる

人聲なく 砂響する 余の 舞掛屋の 奥に

明りり 縁の色を 聴き

心の 隙に 情熱の 揺れ

理想の 秋を 入る

燃へ上る 情熱を いつと 握めてゐる

雪の 幹に 一匹の 小鳥を 睡眠く 也

勇敢な 老は この 抱えを 這ひ 歩く

微かな 息 白く 微かな 蔭を

そらへて 夏小川の 羽衣に けり ぬ たる は

暖の 明さ 忍 木も なく

大 舞木 の 如く よい の けり

さ 木と ああ 我が 志 (い) し

余りの 進 舞と ためて 眠 目 一 二 あり

JUN 15 1928

0047

ギヤスを 何ん何ん様やし

透視の湯毒に一杯湯を湛へ

おろの中で 新け汗と汗を洗ひ落す

いり心 意気大に言う上へば

表面に染りた 灰色の汗は 身体にしみ込む

湯にぬめは 表面は 汗と汗の 夏実だ

汗水をきると同時に 新も飛ぶ中

新は 悔み 木は 不可能なで

新 汗の毒をながす

新は 新く 水が 銚身を 拭く

湯槽に身を横した

新は そこに 夫国を 観た

い、 新で 身を 伸ばし

もやもやと 汗の 毒を ながす

何もなく 新は 汗に 乾く

たうたうと 汗が 全身に 染み

もやもやと 汗の 毒を ながす

新く

新は 人 目界に 出た

全身を 拭く

汗を ながす

JUN 15 1928

0049

JUN 15 1928

0048

望遠鏡

初夏の薄暗がりには噴水を高く飾り

今園の鳩はもう上には

考へて午前十に値々に倒れた。努力働者

午後の電燈は消えたり 點つたり

ビレテラ
~~ビレテラ~~
壁に

そしてまた暗くしてめくはて

女が三尺手前を左に往く

あや白のしき
落つる換ふ

中第

俺は左を向つて立ち上る

さ

響の

惨
参
上
る
血
を
か
き
か
り
は

深き奥でふと立ち 立ちあふうと

何のまゝにある 女の

は指式に

世に式に携け

を

何のまゝにある この花に

朝の上上にわらうと

夕の光の隅の夜臺に 弦月を携て

何のまゝにある 俺の

俺は餘りに気が病を

永もあなを女を母を

今日一日の僕を生かす

何となく何となく

JUN 24 1928
0051

JUN 18 1928
0050

夢を喰ひて 夢を喰ひ

理地に生きた 革命児

顔を拭いて 夢を喰ひ

現実に生きた 労働者

またまたと 遠くへ 生きた

二ノ方から の 傍に あり

さあ 偉い 労働者

さあ 夢を喰ひて 革命児

今日の 夢が 胸に 響き する

心 晴れて 蒼きに

くつきりと 己を 描いて 行く

三番 火曜日

今日は 冬の日 頭腦 明瞭 なる 方 だ たら け じ ゃ ない

神 經 衰 弱 の 症 状 は 失 せ ぬ け だ

小説も 書き 方 だ たら け じ ゃ ない け だ 筆 づ いた 本 じ け

に 思 へ ぬ け だ け だ

昨 日 は 脇 小 骨 の 辺 挿 入 の (三) を 見 送 った 便 人

君 が 登 った 塔 は 塔 だ たら け じ ゃ ない

JUN 25 1928
0052

JUN 26 1928

大陽晝空の氣中で

この勝利者だ

ユーカーは不動だ

叫了、
問、
許、
笑、
悲、

擾音の綱ひ息づくものは

家畜の群 潤土花 街の生活 我々思ふ
凍る坂を、傷く哀愁、 寂しき眺め

ためらふて我、

一日五更名為後天一夜

山陰にもゆき

すくすく伸びるものよ

我は
腰ま
つく
その
下に
生
きて
居る
が

我は太
許を誰か
一木^のな
る木に

許を以て一木の花
 ありきとすべし

熱射とも輝きの陽に

吹き来水の鉄に溶ける雀

水に雷木羽を 驚かして

ふとこの中に一匹、カガミ来る

珍うその一匹、静寂に

逆乃く雀あり 遠くより

遠く 飛りあり

やがて接近に 他とあるを

珍うその一匹、山鳥

ふと 奇聲を 発して 飛り去る

雀は

あうそ、けづく、雀の 聲は 遠く 静かに

大 後を 飛り 去る

今日 二つの 雀

今 静かに

回廊より 剣佐の 雀の 鳴きを 聞き 子に 三つ 又 七 羽 帰る

今 雀は 大 其の 鳴き

鳴き 悲し みの 鳴き たり

有 三白 及 十二時が 万々利 耳

不 思 議 不 思 議 目 受 め た 時 に は

母 父 (三 人) を 見 た

こ

母 父 (三 人) に あり 父 父 目 受 め た 時 に は

母 父 (三 人) に

父 父 目 受 め た 時 に は 父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は 父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

父 父 目 受 め た 時 に は

行書人

軒々、陽は花をほろろ

舞方なるを国にまき正輝リ

我はるりつ、スを抱つて、節をなす、行商人

接吻を取つて、主婦も

あやけなる、恒茂の、眼、瞬

隣り隣りと、より行する

尚もまゝ、スースースも持て、郎の、まき

みす、みす、みすに、まき、まき、まき

語り、なやみ、まき

人なく、冷たく、活きたる、青毫

みす、みす、みす、みす

みす、みす、みす、みす

みす、みす、みす、みす

みす、みす、みす、みす

みす、みす、みす、みす

おひ、おひ、おひ、おひ

みす、みす、みす、みす

みす、みす、みす、みす

みす、みす、みす、みす

白鷺（アサギ）

胸窓に電燈を覗きこみ

誰か来たやうだ

言葉を飲みやうか

目かくしをするたうら

背は君の如く
私の髪は命の
髪よりこみ

時計が何れ物語

何でぬくのか

忘れぬた道徳を
解き、前途を

静けさ

光が
明る

花が

天井の鏡の反射が

鏡に私は囁きこみ

眠たくて眠り待て候へ、静かに

私たちがこの
手に待ちあひ

美しうな歩を辿つて花畑

山しつか木でけいさく水が流る

睡眠うんち君と海へ心

甘圃園をはねて両手を伸ばし

0056

JUL 2 1928

新はあ 顔には髪がはれこつた

足は水び濡れこゑる

髪は汗が流れてゐる

心臓には血がたぎつてゐる

雨水は力一杯 エレクターを押して行く

この炎天に唄くものは生暖か風

なぐさめりものは 夜の 衣木 煙 暗 晩

倦をこらうつものは 燃えあがりの生洗物だ

儼は明日を今更のやうに傷く

あつ 三

その眼はにみくさり 頬のうろたへたけ面

中針の毛髪が 裏髪の下に 赤く 腫れ曲がり

一可哀相にと、一

あつ 三

襦袢服、足おぼよと

十年の毛髪が 裏髪の下で 家輝の明りを濡ひ

一復た、来たのよ、と、

あつ 三

裏髪、下は黒く 動くもの

青い 襦袢 足は 埃りと 垢と けた 体

一食が 一人 何處にも 行くところは 方々 だういふと

JUL 2 1928

0057

0058

JUL 3 1928

お主婦さん 煮る方はいす

この食は飽きません

傷く仕事無く

傷くには辛辛方々

その怒りやうな食に一日はどんなに重くの世間と焦燥と

生つて敷着か

お主婦さん 飽きない

女中の方 居方辛酒の 張食を 辛辛方々

一人の食が 食はもたへるを増やすか

海老の揚げ

山麓に突きた緑色は白皮を喰ふ揚げ物である

海老の生え 具の時着し くるみのかりに 是等い

て 食うすかす 干膳に まえ合つた 柱の敷えに

針月の祈りを 高へるは この 揚げ物

走りまゝ子 海老の 揚げ物 揚げ物 揚げ物

揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物

揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物

揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物

揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物

揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物

揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物

揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物

揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物

揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物 揚げ物

JUL 7 1928 00 59

カリヤの花 柳の中に 水 簾に 映る 高き

花 葉 花 葉 花 葉

の 夕 陽 を 眺 め 等

花 葉 花 葉 花 葉 花 葉

有る 花 には 年 上 の 花 葉 は 別 な ゆう 雅 友 群 れ

仲 の 仲 へ と 群 衆 を 眺 め 等

小 鳥 も 群 衆 に 降 り

蜂 蜂 蜂

事 も の 中 へ 手 和 順 認 な こと 過 去 性 の 限

大 馬 車 を 知 り 苗 葉 を 夜 を 更 に 花 葉 を 群 衆 に

朝 の 光 を 無 言 の 花 柳 映 射 花 葉 を 眺 め

言 子 は 諸 君 に 傍 り 等

花 葉 は 心 を 用 け 無 言 の 物 語 を 語

汗 に 濡 れ 花 葉 を 眺 め 等 水 簾 を 眺 め 等

水 簾 の 光 射 水 の 乱 折

花 葉 を 眺 め 等 水 簾 を 眺 め 等

花 葉 を 眺 め 等 水 簾 を 眺 め 等

花 葉 を 眺 め 等 水 簾 を 眺 め 等

花 葉 を 眺 め 等 水 簾 を 眺 め 等

花 葉 を 眺 め 等 水 簾 を 眺 め 等

花 葉 を 眺 め 等 水 簾 を 眺 め 等

00 23

熱一氣をとやす咽喉のつめだき歎けい

JUL 8 1928

00 61

幸留にちたうして不幸のあやふみ
不幸のなかに幸福を偲つる身

平次
の
道に
荷
男を
求め
る
が
き

美威

この街の焼場の街にまたやて

なきものへのきよ

アイスクリームを食べる

永年堂

子、子、子

JUL 10 1928

00 62

[illegible]

徐莘、水之生於
一而
了父

手紙をたふ
お返が、
受あ、来月光りよ

破木帽子を
三上孝
4ヨリに
需木鞭を引て播了
木は

7/11/20

汗を拭き、其の事
は、親父の油い麵の
味な夏の花より見た
り

静かに長
 ねかな、
 寝しつ
 母の
~~おは~~
 かに
 うん
 む
 う
 う

も
船
に
を
引
き
寄
り
て
お
く

子

美人にも、金持にも、華者にも、兵隊にも、下等民にも

眼に見臨み仕事に
和加仕事に心を
懸け溜息を吐く

すのびⅤ
3

新は 新の生命の何をもめざるが
明暗とてその夢を醒めさせし
何に流すやと
かみ

ちあぐれた風は 午後の 夏 暮れも 草一室ね
君 齋の 燐 焼の 塾の 住永の ひとく

花は 国と

イニギは 早く
売 村は 走り 返る

船 不 瞳は なく 眠 気は 大い ねま
故 仰の やうな 童心に すがらうとする

まほーの 窓 硝子よ

住むともなく 住み 移り せり かりやに

廻り つけ 夏は 今より ひと なる

明日も 来る まで

掌の 荒木 縁の 裡に 土の 夢を 焼 けけ なく

JUL 10 1928

00 63

昔生け

波が岩に砕けこは

おつた

岩をの明く

碧海の空をしく

岩の重く

波の白く

動は静かに

海と ~~静~~ 静かに

この自然な感じを

静かに

我々も感じ

潮の音は平明な音律に

我々歩きのほろりな音を

水たまりをため

岩の上を撫に走り回す

何となく心あやう

無音の味を教える誰か

こゝろ

指を動かす

JUL 1 1928
0065

0064
JUL 1 1928
0065

荷問の申には
竟かあつた

大方廣經

望以夢心何也
同之系也

手は可いもの
キ
かか
ま
ま

足はかけり

以史爲鑑

心付 正しく 解全心

白体はよく健康だ

14
24
25

世のやはきほつに
狭く
うさく
あさく
くして

人は
木々
篠々
すず
かたて

永くは
4つとも
ない
→ 労働者
とは

何にも事ぬ

[illegible]

10/1
 10/2
 10/3
 10/4
 10/5
 10/6
 10/7
 10/8
 10/9
 10/10
 10/11
 10/12
 10/13
 10/14
 10/15
 10/16
 10/17
 10/18
 10/19
 10/20
 10/21
 10/22
 10/23
 10/24
 10/25
 10/26
 10/27
 10/28
 10/29
 10/30
 10/31

5. 13 01 43 42 2 40 2 3 2

2/4 4/4 = 2/2

$$V_{\text{eff}} = \frac{1}{2} k x^2 + \frac{1}{2} k y^2 = \frac{1}{2} k (x^2 + y^2)$$

to the left of the line

陳小波 吳大偉 吳子強 吳子強 吳子強

now in the

Handwritten: $\frac{1}{2} \rightarrow x = 4$ ✓ $\frac{1}{2}$ ✓ $x = 4$

JUL 16 1928

0066

鼓行

石心
華心
山心

點
 云
 茂
 云
 蔣

勤
馬
4
4
上
血

絲茅に秋女、
 火女唄に秋女
 琴に秋女

掬うやうに投げた

子へはあや
 撫かり
 よろめこはあや

息子は脱走した

努力の
解は
必ず
得る
こと
である

今日も重荷の縛り
に苦み汗になった。

焦片に薑汁加次煎に服
常服す
自來水は

生の大塚にはのろまです。

婦愛、倦乞、庄に
警刺、
改人た、落、

それは變悪い過去

大股七少二瘦變
たつ 現在

かくすに ^{あつた}~~あつ~~きよにも ^{もの}~~もの~~

白虎也

強
工
に
は
な
る
大
地
は
揺
れ
る

福壽、黄白、芝蔴、一人

車之 既之 明く 暗く 偉大

三尊をみれば
遠く至る

JUL 17 1928
00 67

我
は
人
道
は
一
つ
・
心
は
一
つ

泣き
泣き
泣き
泣き
泣き

夜の時分、
雪の
足音

我を何上まで愛ひ

母の言葉は清くなり
父の聲はかすかになり

集、
三月は日に休む、
手はくあり、
想ふは忘る

24/11/19

改行 朝久に 悔悔す

我々望む
身長々
花野を
素心で
我々
瞳を
括弧
（）

長き年次の落書より罪ヲ

五ノ下
三ノ下
四ノ下
五ノ下
六ノ下
七ノ下
八ノ下
九ノ下
十ノ下
十一ノ下
十二ノ下
十三ノ下
十四ノ下
十五ノ下
十六ノ下
十七ノ下
十八ノ下
十九ノ下
二十ノ下
二十一ノ下
二十二ノ下
二十三ノ下
二十四ノ下
二十五ノ下
二十六ノ下
二十七ノ下
二十八ノ下
二十九ノ下
三十ノ下
三十一ノ下
三十二ノ下
三十三ノ下
三十四ノ下
三十五ノ下
三十六ノ下
三十七ノ下
三十八ノ下
三十九ノ下
四十ノ下
四十一ノ下
四十二ノ下
四十三ノ下
四十四ノ下
四十五ノ下
四十六ノ下
四十七ノ下
四十八ノ下
四十九ノ下
五十ノ下
五十一ノ下
五十二ノ下
五十三ノ下
五十四ノ下
五十五ノ下
五十六ノ下
五十七ノ下
五十八ノ下
五十九ノ下
六十ノ下
六十一ノ下
六十二ノ下
六十三ノ下
六十四ノ下
六十五ノ下
六十六ノ下
六十七ノ下
六十八ノ下
六十九ノ下
七十ノ下
七十一ノ下
七十二ノ下
七十三ノ下
七十四ノ下
七十五ノ下
七十六ノ下
七十七ノ下
七十八ノ下
七十九ノ下
八十ノ下
八十一ノ下
八十二ノ下
八十三ノ下
八十四ノ下
八十五ノ下
八十六ノ下
八十七ノ下
八十八ノ下
八十九ノ下
九十ノ下
九十一ノ下
九十二ノ下
九十三ノ下
九十四ノ下
九十五ノ下
九十六ノ下
九十七ノ下
九十八ノ下
九十九ノ下
百ノ下

生きた鱗が方り、
落葉、下本^り落葉なり

水、
力、
女に
なり

微々焉

愛
 こゝろ
 と
 け
 る
 恨
 心
 を
 磨
 ぐ
 自
 身
 を
 改
 め
 る

皮に包み込んでおく。よきゆりをこし

新井 圭子 (五)

$$\frac{1}{2} \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} \right)$$

我に微笑す
~~我は~~人
をよめる

頸を折り手を折り足を折り

高下
 群
 乃
 月
 夜
 衣
 心
 在
 謹
 建
 在
 現

か
い
と
ふ

今日も心を抱きて愛を筆に託し我々共は

流 彈丸

月 將 彈を射入またたいて

白く細帯を原々と堅く巻き付けた

眼は開けられ耳は重々しく重なりあつた

花の白く春を知り鼻の端が赤くあつた

海雲に潮の香に夏を覗き鼻は大きく赤くあつた

言もかくえりもなく落葉の音は言ひめた鼻

先よ、身を利す次點の 冷氣は鼻はくちくち

大気を吸ひ

大気を鼓

神佐の縮み上つた痛み

もどろしき痒痛に 皮膚處

明く 痛を解き 明く 痛

明く 痛を解き 明く 痛

幸にあつた 痛を解き 明く 痛

神 男 火 痛を解き 明く 痛

痛を解き 明く 痛

痛を解き 明く 痛

痛を解き 明く 痛

痛を解き 明く 痛

JUL 18 1928

00 68

縁を装ふて 伸ひ又 縮み

若さよ、この尺取女は大陽に従って行く

肉弛み 心かすみ

何となく

しかし

大陽に携り 落しきりまゝと

あや 粧木 半陰半陽を 日影を 歎くまゝ

黒く 冷たく 寂しき 夜

夜の星々に もう語りますまい

睡眠は 樹の芽の 雨露を 極むてゐます

野良の 墮り 背の汗 肘の 節々の 痒み

地下にさへ、 虫の 聲に ^{何も} 訊かれますまい

朝の、 熱い 空の 風を 浴びて

伸ひ又 縮み

夏 晝の つかぬ 暑さ さらけ

花 咲く 光

その 中に 縁を 装ふて 生きて行く

縁を 装ふて 生きて行く

若さよ この尺取女は大陽についで生きて行く

唐(花) 其(花) 其(花)

白菊の花よと

針雲勢と言へ

心は云ふお

花も其(花)の想(花)を

跡(花)と冷(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

今(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

花(花)の想(花)を

JUL 22 1928

0070

白くを認めて見たい。で書て見よう。

七月三日の 大騒動 半巻

婦人、さうして僕の仕事を、この人だ、と。自分、
仕事も、さういふ言ふ。併し、介し見れば、日更に、傍り、この、たつた
他の人の仕事を、僕に、さういふ、目撃者にして

他の、弱き、さうして、僕、さういふ、思はない

夜、筆、さういふ、さういふ、電話、さういふ、
これ、さういふ、さういふ、さういふ、
これ、さういふ、さういふ、さういふ、

これ、さういふ、さういふ、さういふ、

さういふ、さういふ、さういふ、

創作、さういふ、さういふ、

詩、さういふ、さういふ、

これ、さういふ、さういふ、

さういふ、さういふ、さういふ、

これ、さういふ、さういふ、

これ、さういふ、さういふ、

これ、さういふ、さういふ、

これ、さういふ、さういふ、

これ、さういふ、さういふ、

これ、さういふ、さういふ、

蝶と蜂のふりかたを写す事にする

七月二十五日

庭先を感ぜしきり秋の気配に於て佇みやうひをたふさぐ
午後より仕事で終る事にして翌日午後に役。事を頼む
一歩あう三等色体と
よく睡眠する 是より翌日主じに寝入 心おだやか
夢を覚めて浮気する 三かきまつ
もう、別荘に事をあつたうと 明日堂より大塚を
参り、かりくり落す付けぬ
庭は創作つてもあるたふ ともて事なうした。

七月二十日

柳井寺へ、マシマの車の邊までまの白道をぬき
山形より代筆で原稿をまきこいた
五反近くで用さくおろく書き上げた。

マシマの急事には外し、まふじ来た人だのうさ
僕も喧嘩の相手はあつた。

昨日より仕事で終る事にして翌日午後に役。事を頼む
一歩あう三等色体と

よく睡眠する 是より翌日主じに寝入 心おだやか
夢を覚めて浮気する 三かきまつ

もう、別荘に事をあつたうと 明日堂より大塚を
参り、かりくり落す付けぬ
庭は創作つてもあるたふ ともて事なうした。

有七曰 火鑪

山部 吾、老の外習を失ふは甚しい事なりと思ふ、
如由多々事なり、ナリ候人、黒衣トクナリと増えたりと云ふ事

12
1-
18
 $\frac{2}{3}$
8
5
1
7
3
5
15
1
澤
2

信は――も修く一石を七と考へゝた。

創作
創作に熱中して行く
人々も無くして

何
も
な
し
。

十、七、傷、何、文、書、日、儻、年、早、、創作、

主事のもの

漢書に於て朝貢の國に

一人のこゝろが、
たゞ一人のこゝろ

高き心ある書とある

汗に
痂木に、
乾いた風に
落葉に
鐘道に

悔や^も事^もな^りき^き、
白^く分^る心^{こころ}を^を海^{うみ}に^に流^{なが}す^す

未だ其力、
増す

3
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 5

生命の萌芽、
1/4日に5枚の
胚が伸びた。

夜日
興り
井丸
182

搭子
42後
3

事今更のうはも
二五又のうはも
水廻り
小窓の
うはも
草花
下

ところで、
 心のおくを
 手にとり
 みる。

標

41
187
5
1

0071

夏う夜三

ゆくゆくは木の下に寝ては光を浴びて木の下

賢くもならず 暑くも木の下に寝ては光を浴びて

電車も寝る言も 木の下に寝ては光を浴びて

は草の香に 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて 木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて

木の下に寝ては光を浴びて

AUG 28 00 72

何十番目

カハフラーターの米倉代に行く 神を究るの儀
を数するなり也

脳果の組員がカハ人であると言ふに直ぐし
てもうた

日本入でー長價博多言ひ

三人と舞うる白人にナニにナニ

宿の日本館はナニ

木西、新田と三人、及持人、上野、寺子

何十三日

夜か全パラーターに行く 米倉

米倉の之儀は度の方

性の研究を因へ 上性文、又、米倉

何十番目

コホロギ

コホロギの聲が響く夏の夜をたぐひ

七年の前に白茅で別れたコホロギを

懐かしの別り際の方で

静かになつと想ふとは

電車目撃事知接言にどきどき

又人々なり一夜身に送る

糸を煮くやうに 次あるやうに

ホはふと 今の言つて 破窓を 見上げ

暗い気は 何處かに消え失せし

馬白く走る 破窓硝子に 一枚

女中の影が射る

父甲おれ 煙草の味と

影が射るなく 雫の影が映つて来た

コホロギの 聲がに おこる

小鳥の
露の
朝に

和ハ病ヲ治シテ又チ

金も 香も 久りも

あ
あ
い
は
ほ
ほ
う
こ
お
す

意に
金に
健康に

唯々
和は甘差
之に嘆息を
殺し
持こみまう

121 はいかでさ

1 ラテオ能 用きすく

1
そ
れ
と
も
か
ら
な
い
も
と

い
く
之
自
耳
眼
手
子

3
-
ハ
シ
た
ま
る

交 美 交 に 山 知 本 二 五 た i 9 v s

逆志

いたづらおぼしき

九十五
年
才
家
以
阿
五
女

大斗目也
松ノ
2日
41
23

そ
あ
い
~~あ~~
また

場所が、あふない

い
ろ
か

あ
あ
= も
し
た
ん
T₂
) E
と

海に決するも

いやりや 燈臺の上に坐す

$$\frac{1}{2} = \frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$$

矢、熊人、

AUG 31 1928

0074

3075

憔悴

外は涼風の吹く

糸は意のままに

憔悴

外には涼風が

窓には茶一

その間

糸はまじりたり

母

鉄網の

群集に

母は

おひき

糸は

小使は

糸は

糸は

糸は

廻

0077
AUG 20 1928

0076
AUG 18 1928

昨日と言わす 今日

寂しみの掌に夕日を見て

南夢 おたまたのミ切鉄

訪るる想を謀はれて

殺罪の夜の街に飛来した

言さるるデングの砂金に

我れは正に 陽にナリ

ひき取つて 新聞紙に

竹無が

崩れ始りし灰色の言葉

五七

オノの瞳

二つの瞳 二つの肺 書と夜

我れは二人一燈に生れた

我れは 友生見た

たろえと 知れたい

人々は仰二つと言ふ

僕等は五生になりた

34

AUG 20 1928

0079

0080

AUG 21 1928

0078

AUG 21 1928

束縛を脱した自由

竹籠の底にひしひしと響く

糸は不思議に思はない

餅子餅の底に金魚が隠れをふくみおどろく

糸は不思議に思はない

糸の底に仁丹餅やかんかんを隠す

糸は不思議に思はない

糸の底に生花を隠す

糸は不思議に思はない

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

糸の底に生花を隠す

AUG 30 1928 0083

AUG 26 1928 0082

00106

病ヲ癒れぬ哀れ軀を

紫光線の寫真に横たわれし

我を心して伸び伸いと

我は幻の想なり

此の若人たる夜の卓に

髪より蔭を

10.9.26

瞳の芯に狂々上る茎悴に

明あめと輝く雲に
抱にまけて

和け小聲に牙を

故郷もなも永も無く

さすくらの血涙に

重なる明れば

我が心の蔭は

冷たき床に

半に伸び
上を伝ふ

AUG 31 1928

00834

AUG 31 1928

0081

0089

いふから女に
お尋ねを
連れて
いかに
お尋ねを
お尋ねする

女
3
夜

ある夜
糸は一寸の糸を糸糸やたて
事かある
壁紙の
（入）人びました

何々所柔息々自己陶碎

事
甚より平ふ事な
常事なる

和は ^{暖む} 春の ^一 雨 ^や は ^い ん ^な だ ^に ^あ り ^ま す ^く
 2 ^は ^う ^た ^事 ^を ^あ ^り

偶
可

白分て、意欲す。其々
いんむに其々至るふ

彙考
廿
化
に
一
升)
く
や
了
に

我々には知らぬ方々の姿を
見ることは出来ぬ

三三三矢の矢

人生に必要な生活の過半を占めることを知るは方々ぬ

美

最良の友は 実の父には

戦々

ついで、（道化師）
で来る
あやうな
た

今
私は 現在より自分より女性に微笑を送る

に微笑を送る

SEP 1 1928

0085

旅歌

写しより筆でつゝの筆に

2の明り 旅の故郷を

雲に隠れぬ 旅の故郷を

このカミランの故郷に 女は日暮と 言ひしに 我は之と 言ふまで

半時を 見れば 此の故郷に 女は 言ひしに 我は之と 言ふまで

かし とも 言ひしに 我は之と 言ふまで

トランプの 故郷に 女は 言ひしに 我は之と 言ふまで

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

旅し 女に 故郷を

九月十日 出桑す

事完は加川文一と隣に居る

夜加川詣に泊し

松平、珠、樹 中川、卓 下山、勉、蒼

父等、會談す

宿室に

春井、卯、4、燦、室に、父、墨、吾の向ふなり

九月十日 父に歸るに 父の父より

父喜ぶ 父も可なり老たり

我は 子より、なす、バ、事、し、る、な、う、い、供、は、時、

く、人、の、父、に、幸、福、方、本、と、初、う、た、は、今、も、あ、た、。

十日 土曜日

子他、昭和、探、に、蕨、也、會、に、の、と、文、

蜀、化、一、甲、の、松、平、移、樹、かり、文、一、下、山、芒、蒼、新、田、太、

中川、卓、も、父、墨、穂、刈、さ、う、何、う、二、三、人、な、り

十一日 日曜

美山、有、會、に、上、来、す

十五日 土曜

十日 父、弟、代、の、道、た、き、道、り、上、な、會、文、

子、自、由、文、に、松、平、の、

十九日 水

朝の、父、事、に、居、る、の、向、子、

其の心に 夜更けの鐘に 我が外奪はぬ

を腹よ 啼泣は 弟は我を託は

我が故は色香如めた衣を着る生人なり

迷ふ 迷ふ つ子やく

轉る 夜一頁美人に歩く人ありとを

やたう思ふ我なりか

夕上下 月上

御算のう 名を呼びたすか

何と云ふか 大の道も同じく 人の

車に 今

明き夜も走り

創作
題 安産の祈り

回春新集の夫婦の二人目の子の死病に嘆く事を書さ

主の制限の最早と一悲に死を待つ描き

人生観といふ ぬが。ち生はやす(と)逆に

美人と一針と生たの 難を置く事にする。

漫文

早燈、燈は一瞬、一條も許さず、刻を運ぶ時、遅中

たう喘息ををかくす
夜は秋に召さんた、い 情はもろく 性は懶く 力は限る
変るやの瞳に ややかに 燃へる 脚 息 夢 恋 の なやみは

薄り希望の車に備え 程に 愛 包 ま れ て 釋 放 の 望 を 告 ぐ

今宵の想は 鐘を聞き大鼓を聞き 何やら夜半の響を聞き

あけやうの団圓に集ふ 親類縁者、とを 忘れ

さあどー現実の荒き手を 日にやけた頬を すぐさま脚を

再びたけ 刻の斧にうすめすー その 悲 恋 は 冷 寒 に

舞 迷 了 夜 半 の そよ風に 夢 追 は れ い め じ め と した 心 途

に 雨 後 を 注 ぎ 幸 な き 土 の 寒 みの り き う ば り に も なる

目くー 秋の聲ー 恵の聲ー 空外に充ち満ちて

あり余る勢もあるあると

SEP 2 1928 0089

人生、一角を勝った

僂は 蟹りい 4ヤイナを金バヤとーへみち入
すし 向る側には針葉つ娘が下

カ、フ、エ
キヤイナシ
会、ヤ、
ー、
一、二、
一、に、あ、え

倭
15
12
3
13
3
2
4
12
3
た
2
芝
た

すゝ 焼もじろじろ 焼て貝へ 走
か 西 今 想 に たい い きたあ

ひま

信はもがけに焼いたた皿をのぞくみたよ

すゝく
あやう
すゝく
や
ふ
い
か

い
の
手
に
金

て僕
は
思
つ
た
ん
だ

女
9
姓
十
人

女々姫さん
 二等月をたまたまに
 飛天の如く
 手もきつて
 足もきつて
 足もきつて

二
4
月
と
左
左
メ
々
12

11
2
5
6
2
1
3
4
2
2
7

候りすなれどもすこしまゐたうし

や
ふ
な
に
ふ
ふ

言
ひ
そ
う
た
ま

Prevalence of UTI
in the elderly

第 2, 第 4 组

OCT 10 1928
00 90

0080

私の心はいつも接吻を求めている

私はいつも心に女を誘うとは思っている

或る寒い夜

私は抱擁の中に接吻を求めた

私はこのぬるぬるで　　その女の女を求めた

私は姉さんと姉を

青春の日の中に誘引している

その夜　私は僅少の路にたつた

か　　し　　雨に打たれて来た

私は今もいつまでも思っている

心の接吻と鏡の中に誘った女を

そして

其の夜の雨に　私はどんな金形に馬かぶ

しまったのを

夜なうた　　雪の想いに

物持　　一　　葉　　を　　牛　　と　　した

僕は　　僕　　を　　僕　　と　　して　　も

わ　　か　　り　　な　　い　　人

女の　　心　　を　　と　　る

0091

(15)

アニタア セイヤン ヲイラホー
 アンカアセ アヤカアセ

セレウス島
 ハリクハハンのキャンピングヤ
 印変人ククリーの写

サイアニカネー ラサ サイアニカネー
 オンバーポテブ オンハ ラワタンタシヤウア
 キワラス レザ アフタナ アニホンス チヤウア

其の仁葉を 倭は 憚る

倭の心は 春春に せたるこゝろ

其の夏 陽に 汗を 流した皮

倭は 陽に 汗を 流した皮

倭は 陽に 汗を 流した皮

倭は 陽に 汗を 流した皮

倭は 陽に 汗を 流した皮

倭は 陽に 汗を 流した皮

其の 汗を 流した皮

倭は 汗を 流した皮

OCT 21 1928
 0093

夕三 詩集

泥靴

夜灯に影の川 ありに

涙りたまは 道徳を断り

秋の木の葉に光る金

傷の 感傷の 現界に

糸は見た

書一を 夜を

暖く流木を 微笑を 愛情詩を

糸は何を老うてゐるのたう

黄一峰に口唇のけええ

糸は何を求め

糸は何に陰影してゐるのたう

入陽の金に鼓か木こ

糸は西に歩くとある

実か木行く

OCT 24 1928

0094

0000
001541058

その速さ そのうらやまは
詠嘆の時あふれし

青春の血は滑流を巻く
ホッ等の如くほんとうさまたるなり

我は這れる途を失ひ
神をも知らず

只唯 夢魚の如く泳ぎこた

あくなき悪心は光りの目をも白く染る
怖ろしきに

まねのやうな力に 我はまじりたり
狂ひぬ

なはなとあらつ
血は血を誘ふ

睹 馬はまじりの力を
我よりうねり

我を忘る
我が血の渾に 我を泳がしめ

あふる日

夏聖は揺れ
大場は蒼い好

秋なまじりの巨塊は
我に 頭悩を縋るなり

叙望は 蒼々とたり

憎悪は 嘲笑に
悔悛にきり

ら 我は 沈黙の
歩みに ありたり

收歎

和を

NOV 0 1928
0095

十月三日 土曜 日

電
信
局
の
電
報
機

うん、いゝも、ち難うひさます。
けと年う好い^に甘い^にさき

1
24
8, normalized,
に
と
た。
と
雲
を
あ
り

昔年氏女心
ひしこ
てふ
る
なう

下町
山崎
心
過
升
未
夫
吾
を
誅
し
更

十二印
 27
 12
 1
 支那
 領土
 争い。
 華人先づは
 免れ
 謝す。

第 1

廿年人欠世の文場人佐和
佐藤小春去以、谷崎(衛)一師

代達との交際を因く

是、石の塊を佐藤氏、谷垣氏に
授け、金銀一砂、金銀の中の一は其の

1. 下等

佛蔵考夫(本を二冊と分す)のうわやも。いりた

上馬茅人(一) 一 等々と行く

古の上にはと執り昔が生こる

もうもくまいきもう語こまい

鏝えんいこいろろたたれれれれ久く遠えんののああららききを

明めいろろかにかに 所しよはは憎にくむ 其そののの気き持もち詩しを

牛うやや雲うんにに 瓶びん子こ花はなにに 泥でい靴くつにに

所しよはは火か熱ねつをを投なげげつつけける

歸かへりり解とるる 朝あ日ひにに世よのの節ふし言ことはは需もとめ

命いのち貝かいここ 路ろ梯たのの草くさにに 葉はをを筆ふでああかかよよ

老おろろ介かいふふにに 所しよはは遠とほろろ泣なくく

芽めりり泥でい靴くつにに 襪わのの紐ひもはは破やぶれ

今いまもも今いま 所しよはは時とき美みははアアゲゲジャジャ下したにに鼓こ動どうするする

勞ろう苦くのの軒のきにに意い志しをを 繼つぎぎぎ

樹じゆのの血ちははええるるれれ

瞳ひとみをを睨にらみみるる

所しよはは寒さむいい

創そ作さく身みをを贈くわるる

いつと

0096

NOV 3 1928

216

0097

猫がセシエーションを捲き起したとき

目、光が和りに糸を垂れやうす

さめめと世う葉の戦いあり

女支
この場先の血、生はうに糸を感つ

さうし、やう

(津波が波は湧いた)
集りに今

0/5

心は何がーそれはさきの一帯にうらやう

和りのお腹に何があつた

ク食いたけかりの舞舞するもの

現結ー始めにちかちかキキ

そふも ちき

さうきの春あまが 短く道にでも書き付

てあるい やうか

和のこの腹の力をためす等々来たやうす

夜ひす 霧いす 暗いす

外、春だけいは 春さすきた 秋いけあうまを

秋は朝から雪のこもり
秋は朝から頭を凍らす

秋の瞳は痛む
樹の幹に光りこもる

秋の瞳は細り
木に光りこもる

心もたつ
雨もたつ
大層な心

秋は
冬は
危
に陥つてゐる

秋は冬に
たまりこもる

十音
力

フーハ
の
大
運
を
手
に
は
こ
こ
か
て

回
路
を
建
て
て
カ
メ
ラ
を
ま
き
な
す

フーハの偉業も
回
路
を
建
て
て
カ
メ
ラ
を
ま
き
な
す

10

10

つたうこはし油けり、顔に赤うつた

味事一つ重機をたぶらに

わの自動車は修繕を

いひ

手も衣も顔もさびし

明日は佛にやうなうにわが分高傷り

明日は佛にやうなうにわが分高傷り

わの健康で

おれい、おれい、おれい、おれい、おれい

わの夜は夢の様に静かである

夢見を極めた手が、まじりたり、光りた

わの健康で

何をきいて、言ひ、言ひ、言ひ、言ひ、言ひ

こころ

わの心もくもくと、高のわをいふ

わの心もくもくと、高のわをいふ

わの健康で

わの健康で、わの健康で、わの健康で、わの健康で、わの健康で

細い瞳は心を語らふ

返り咲きかな 秋の曇天に櫻

いはいはい

鏡の底さ笑ふか空に散る

と目もとを ~~映~~は 我が心

面影に ~~映~~思懐く 曇天よ

千に ~~映~~ハヤ 猶々 中々に

明日を ~~映~~捨て 我々 我々

今日を ~~映~~ ~~映~~外に 常々 常々

映

NOV 7 1928

0103

0703

樹々の枝に 秋はかおいて 澄んびみます

菊の花は 濁んびりまきさうひす

誰れも 剪り取る人が 無ついで

嬰女

春のやうな 無 刑え方ひみか

つゆのやうに 髪白 髪を 髪を

二十五の 船は 澄ん 秋の 新色に 澄ん びます

無能なま方ちい 菊を 髪を

軽々 髪を 髪を 救へます

菊の花は 開きさうで

船は たりくつ たります

0104

NOV 9 1928

300

真面目になりたり 正道になりたり

自分は人の前に恥ぢる介をうたくなり

自分は偽り悪をうけりたり

自分は、自らを削るよりは 自今の正 義であり

信にありと思ふ

今日迄 自今 びや 解 自この完成にうとり

この二角も失敗たことであらう

自分は人を憎うたない 要義を持すなり

自分は 在りのままの人同 自今の前に連

て来た人だから

地裁 持はうも 雲見 解りも 美にも

超然と 無言の介を 持てみる

自今 自今に

父に ことなき 田を増やふを 一増要し

来た

けれども 自今 偽りを せ入けりた

自今の 真実 毎日に 若も 自今に 毛を 持ち

今 毛も 持ち

情にたぎるもに 情に ともに 情に 情に

同に 文 藝 進 歩 する こと 思 っ ち

いふの 親 友 と 信 じ る 人 山 野 君 に さ へ 七

愛 意 を 持 ち だ っ ち だ

山 野 君 は 事 実 上 性 格 破 産 者 だ っ ち

だ っ ち

自 分 と 共 に 甚 重 傷 人 を 悪 く 評 判 せ ば 良 く

も 言 っ ち だ っ ち だ っ ち 自 分 や っ ち だ っ ち

悪 口 っ ち だ っ ち だ っ ち

自 分 の 今 迄 の 信 頼 女 情 々 遠 く 無 じ だ

つ 左 事 を 悲 し 思 っ ち

自 分 は 自 己 の 完 全 に 務 め っ ち

他 人 の 事 に つ も 少 ち だ っ ち

得 ず だ っ ち だ っ ち だ っ ち 自 分 は 良 き 格 子

と なる だ っ ち だ っ ち

自 分 の 文 藝 を 本 は 何 だ っ ち だ っ ち

い っ ち だ っ ち だ っ ち だ っ ち

人々は機械のやうに動いた

そこは交差点であつたから

回響る

電車かう喘りた一人の老婆が

物の電車にうつて

来り騒ぐ一やうに黙つて立ち上る手を掲げた

傾し電車は

且つ且つと急ぎ急ぎを脱れまじと行き過ぎた

サイリウオに光を運ぶ老婆前へおめた

老婆は何か囁き囁き神道にも通じて

私は此の老婆の姿を

行き過ぎる電車の意図を睨み下ろした

無

回響る

私は多岐に仕事のことを考へながら

来客にもきかれて黙つて時を待たされた

ふふ先き、老婆の姿が、物の中にはおかしな感じがした。

20

0702
NOV 1928

秋晴の輝に黙して

儼然風に散る落葉を見よ

信は悔思とも云へりともたう落葉を心の動に感ずる

それは

さきぞわたしの4か所落葉ではない

これからの人生一前途に散る不自然な落葉を待たず

手裏の落葉に一人静かに詩

暗闇の静寂に一人想ひの時

食卓に朝の電燈を

食卓に映る電燈の

電燈に照らした電卓は我々の時

信う心に撞り續る落葉を待たず

何處へ望む山は

信は不思慮に好はない

初子何れに望む金魚は木をこけおどす

信は不思慮に好はない

金魚の群は二十日はかんに廻り出す

落葉と生花共に信うふて

信は不思慮に好はない

信の心に撞り續る落葉を待たず

NOV 17 1928

0106

30

NOV 3 1928

半当にあの女が惚れてるといふ

俺は何にもいひぬい俺はた

人のあなり家裏の女事切ひ

のホボラの奥えび

俺は若きな花よりこころ

おりほんやり舌の横顔を見つめこみた

ーと(その女の事等)信実たといふ

一廻り想ひ家裏の奥えび

俺はかつくり小僧をた。

何も思ふたうなう。

与子にもた本もあまなりなる

信はキヤニラ七頼張ノ

ちよりと眼を醒めて

夕陽が横顔にキラメイて

五五ねのスクンパヤに

俺はあかり窓を前に窓外に小娘の光るのを見た

そつと心を揺れた



0100
8010

NOV 24 1928

0107
NOV 1 1928

片眼を見開ス

ヤアヤ竹籬の上にカモメ一匹居る

儂やよきやうだよ

カモメは此方へアツた
（船尾に居る）

「海へ飛ぶことカモメは陸に上ると云ふが

この秋の玄には陽明の暖がある

儂のヨメも木に棲む鳥

いよいよ後か

儂のヨメを暖うするは心に

十月二十九日 本宿

今日は感謝祭いある

お供にありは片眠同親の供にありて

もいありて

研精等外は五、一

今日まで

供はた此のふ自由を常も筆耕にまわさる

詩創作

供り生活を支たす一歩はこころに夢に通まつて来

晴朗な天候も

優柔な挨拶も

甘美な一食草も

こころをとりこはるすこころこころ

いふ金共す

不撓不屈を

藤原友心は供を求めた

娘の室のうすいかりをうなわ

人のせり 夢り 預望のなかに

時計を贖ふるは やもめ

心算をわちまは と言目

復てこの世のたふかしに 放心し

尚も 黙然と歩き居るは

我が世にまゐる 生のとき美

(言ふ)

朝をさす工場の子供を聞きた

書をえんたする子出等の子きまをみた

夜の床に 夢の影に

黙然と床にをうたす 身後の鐘を聞いた

接言 けん隆 疾走

鐘 石 窓 闇に 透りた

時計の表盤に 包ま延 徒の人流を見た

赤は 逆さやかな 途か雪の 勢に

松が 伸び 伸び 天に向ふ 微光するのを見た

闇の 大魂が 針になつて 米うめく 我を

暖かい 暖かい 暖かい 暖かい 暖かい 暖かい 暖かい 暖かい 暖かい 暖かい

短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く

短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く

短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く 短く

DEC 5 1938
0111

窓の隅に
花を挿す

手はひらいて、うなづいて、街路に涙を流して流木

天が地上の色を、まろけして

大地の草花に、
あちろい

新様、スミレ咲くへる、
糸の心に、
うづはる

終日、素直に、
用がたうて

糸、
光る、おはれ、み、う、等を

糸は、
仲、
4つの瞳の、
う、

糸は、
星、
う、

糸は、
う、

その、
う、

十月三日 月曜日

う、
う、

う、
う、

う、
う、

う、
う、

う、
う、

う、
う、

0112

DEC 2 1938

う、

天と地とを境に人知れず

春の山に人知れず

この無限に抱かれた秋の深淵へ

心は

光り

中半の光は原始の光で

自然の光は神の光で

留まらずに

夫れと何のちがひも

美しい人々の愛を

山の光は

心を照らす

山が目を青く澄まし

咽る人々の心を

あきらめ

咽る人々の心を

總てのものに

心

輝く雪の一粒は

山を照らす

DEC 6 1928
0113

再生をおめ 再生あり

窓を明けは 風が流れた
 田舎の 蔭 鬱々たる 商売

私は出て行く

その山奥の 畦中に

暖房増

ありとあふく 生 物は

光りに泳ぐ 海 藻だ

光りか 蕩す 木に 蔭を 配

そこは 沈黙、佳 永 故

私は 流 離り 夢 覚 る とき

この 海 岸 には 何 故 とも 院 あり

多 重 窓

窓より いか 生 き ぬ

一匹の 小 鳥 が 飛 び 行 け

そこは 砂 撲 の 白 雪 一 羽 雁

生 の 隙 隙 生 の 鼓 動 を 叩 け

何 故 まで も 生 の 中 心 あり ぬ

陽 光 と 風 と 雨 と

小 鳥 は う え か き 力 つ き

大地に 花 人 花 人 花 人

花 人 花 人 花 人 花 人

多 重 窓

花 人 花 人 花 人 花 人

花 人 花 人 花 人 花 人

花 人 花 人 花 人 花 人

花 人 花 人 花 人 花 人

花 人 花 人 花 人 花 人

花 人 花 人 花 人 花 人

花 人 花 人 花 人 花 人

0114

DEC 6 1928

余輩を忘るゝ一人

それへ今我々人生に悔いあり

余は博覧強記を誇りあり

余は多岐にわたる知識を有する。同様に思ふ。

車庫

全曲

西に瀕した里士をたがやし

余はスウィーピーのたおまいた

め生え住り繁り

生のカい。新い新いから今

美しき花の色を光の波に揺らす。もまゝはあゝ

余は晴るをみながる。余は抱く

余はかゝる仕事の仕事の。こゝろをうらやまひ

Handwritten notes in the left margin, including "The 2nd part of the story" and other illegible text.

十月十四日

夜一 前日に 田島四一社代から電報来た。

正ま白鳥代をいふとアおにに訪り一而して

紹介するから 白鳥代をあらうはすふ人

いさへ コトも善し 高橋四一社代に付き

上山草人へ

高橋草人代から電報も還にこもる

白鳥代をいふにアおにに訪り一而して 白鳥代をあらうはすふ人

上山草人代をいふにアおにに訪り一而して

暫く高橋草人と新達中に

草人代から訪り来た

正まい夫と草人白鳥代にさう由をつけ

信に夫と草人白鳥代にさう由をつけ

おにともあふ

白鳥代をいふにアおにに訪り一而して

上山草人代をいふにアおにに訪り一而して

高橋草人代をいふにアおにに訪り一而して

十日十時

午前十時に八千七百〇〇

正室白鳥の先生を前へ

甲に送る

午後 夫は在夜

先生をある日、下町まで

夜、石川三ッ江カーニバルへ

散道中に出る

人時平に終り、市川豊成に

坐、護衛に終る

十日十時 散道中

同等

正室白鳥の先生

華々大長

信直

十、ういを

吉田十郎

杉野の電報に正當なる生の奇蹟
本望曰く死を知らず

夜半に呼ぶところを絶えず

田中へ増田へ宛てて

石川や二子や一子や